

4A77

學藝叢書

理學博士坪井正五郎著

人類學叢話

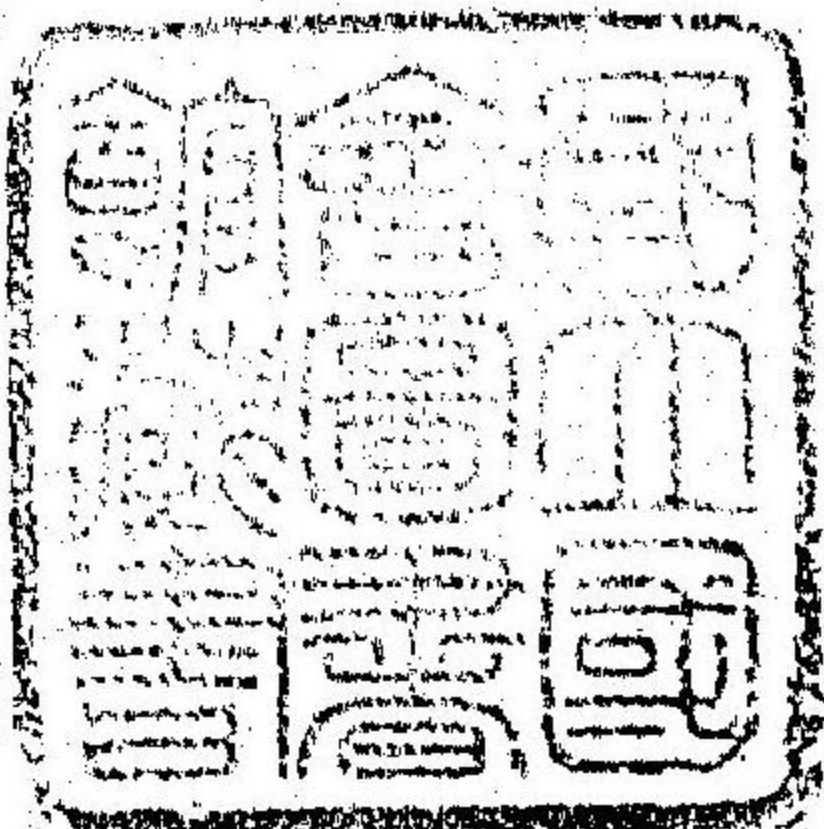
博文館

版藏

東京

人類學叢話

坪井正五郎著述



219379

469
Tab4/332

學藝叢書發刊の主旨

戰捷後の日本帝國は須く國民教育の普及發達を圖らざる可らず、國民の思想行爲にして、高尚善良なるを得ば、國運の隆昌は期して待つべきなり、然り而して深奥なる學術を平易に説述し、趣味津々の裡、能く宇宙萬有の變遷消長の理由を知らしめ、以て健全なる思想を養成するは、國民教育に最も必要の事とす。本館茲に見る所あり、敢て刻下の急務に應ぜんが爲に、本叢書の發刊を企て、現代著名の諸博士に囑して高遠なる學理を卑近に講説し、以て一

般國民の腦裡に入り易からしむ。正確なる事實は流麗なる筆致と相俟ち、加ふるに詳密なる數多の挿畫を以て文意の足らざるを補ふ。讀者若し熟讀玩味せば、常に自然科學の微妙を啓發するのみならず、延いて殖産興業に裨益するもの至大なるや必せり、是れ實に本館以此叢書を發刊し、以て聊か昭代の進運に貢獻する所あらんを欲する微意なり。

明治丁未首春 博文館編輯局

支那人の著書

アフリカ土人 (Senhiki 地方の小黒人) 男 同 (女) 南アメリカ土人 (パタゴニヤ人) 男 同 (女)

北アメリカ土人 (Sioux 種族) 男 同 (女) ホルネサ土人 (Dyak 種族) 男 同 (女)

支那人 男 同 (女) ロックパ人 (スウィツァランド人) 男 同 (女)

庭後室教學類人學大科理

圖の右端にある人面を刻みたるものは鴨緑江右岸在住韓人所製の俵像也木柱(鳥居龍藏氏の携へ歸りたるもの)右の方なる車覆の下に在る櫃形のものに美作國吉田郡澤田村發見の陶棺大さの概略は中央に立てる著者に比較して推知するを得べし



女の人土ヤリラトスーオ



女の人土イフハ



北アメリカ土人



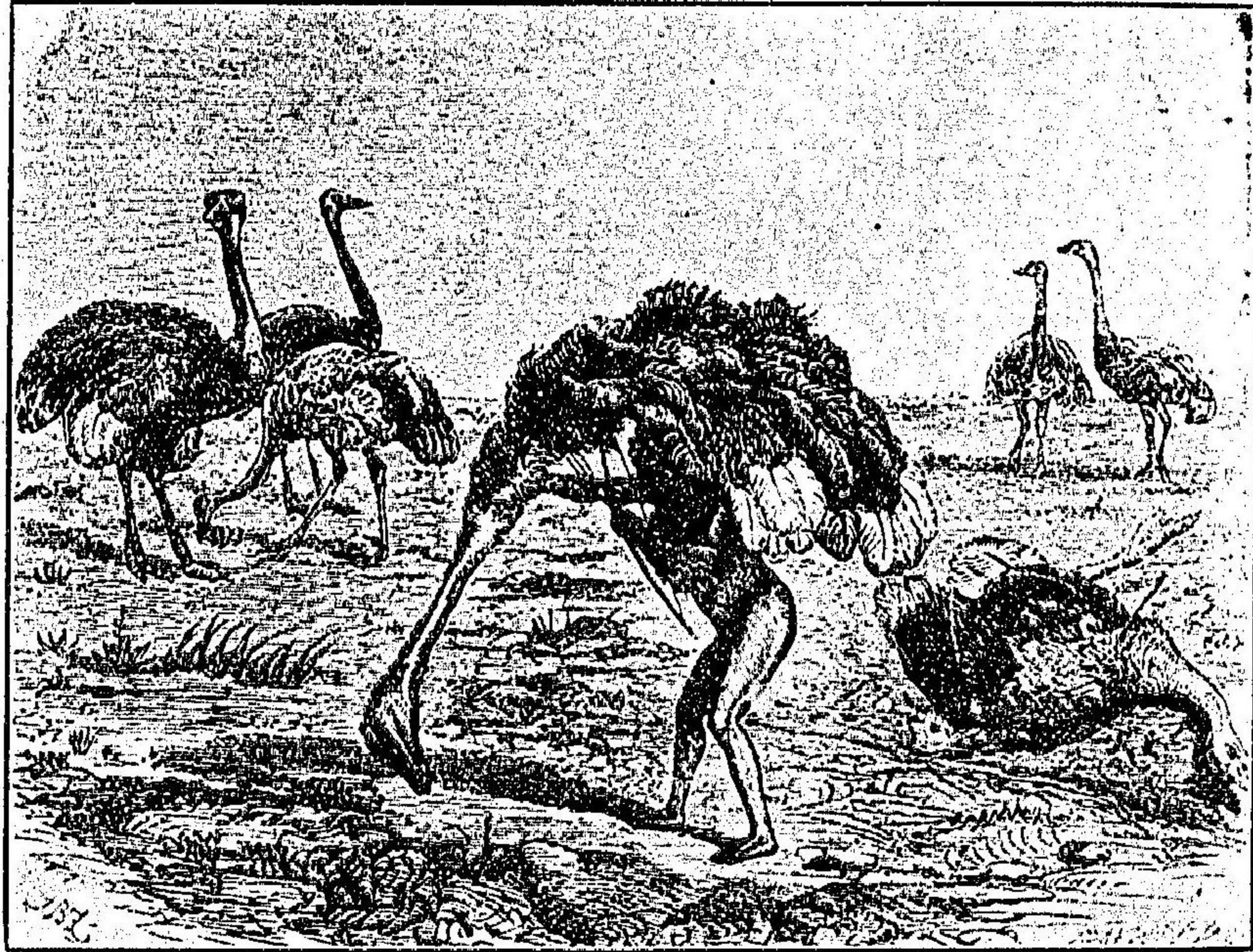
男子の長鬚を示す

アフリカの大小人種

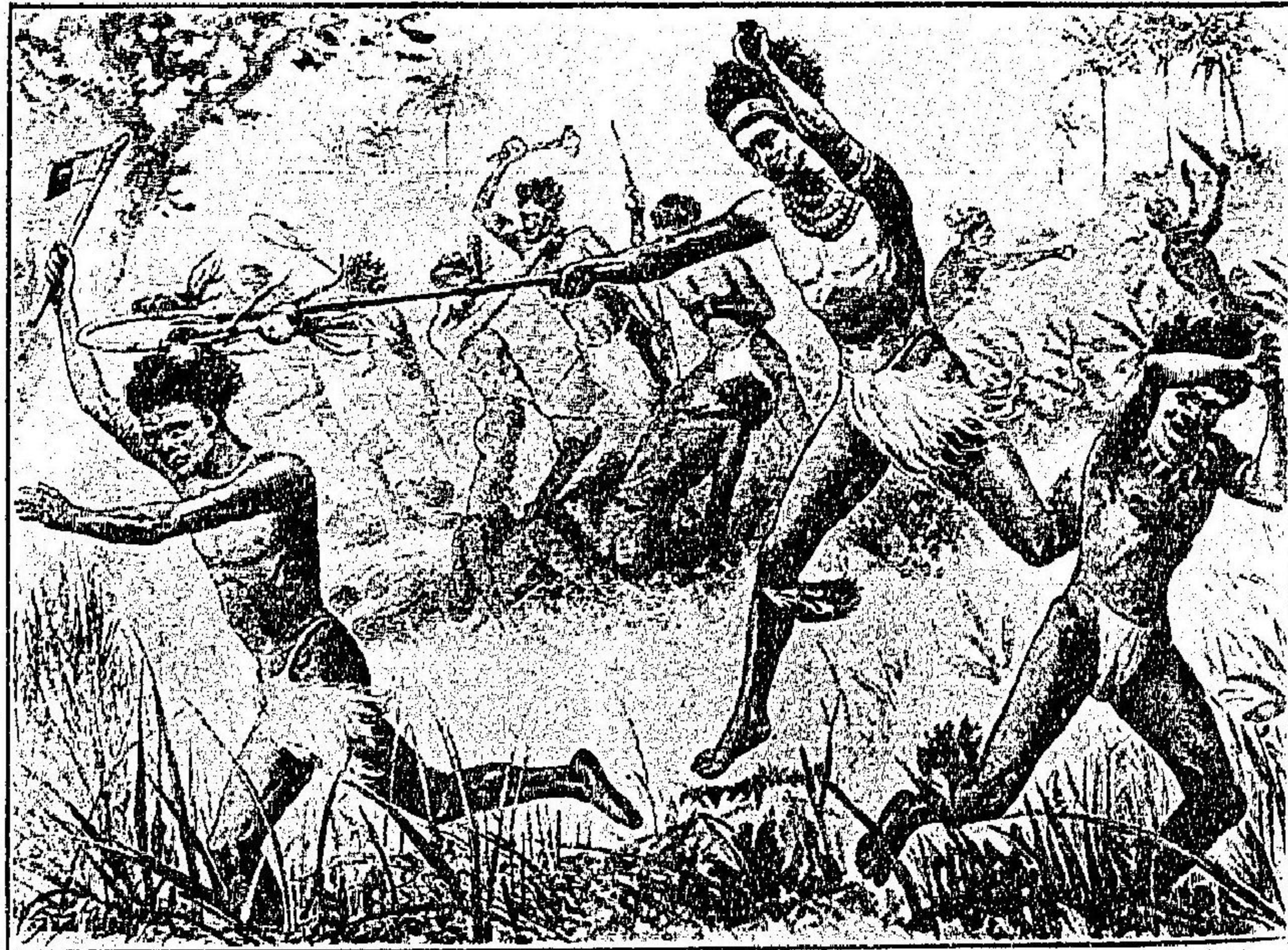


前列はアフリカ中央部の小人後列右端なる二人のイギリス人に續きて左方に立てるはスマン人及びハンジバル人

ふ捕を鳥駝て被を皮の鳥駝ンマシッブ



す用使を器人捕人土ーニギーユニ



緒言

今一冊の書物として讀者の前に提出する此諸篇は題名に示した通り實に叢話で有ります。初めからして一部の書を作る意で筆を執つたのでは有りません。且つ是等は皆一度「太陽」か「中學世界」かに載つたもので有りますから内容に於ても又新たで有るとは云ひ兼ねるので有ります。單に舊稿を其儘で順序構はず集めたものとすれば再び植字職工を煩はす事さへも殆ど無意義と云はなければ成りませんが、出版者の懇な勧めに應ずるに際して記事の訂正文體の一定、配列の整頓、圖畫の増加を謀る事とし、全部に亘り大に面目を更める事としましたので、著者自身も基く所は舊稿にもせよ新たなる形を與へて之を世に公にするのは必しも無益で有る

まいかと考へるに至りました。著者は一見聯絡無きが如き諸種の事物に付いて記す間にも趣旨の一貫を勤めたので有ります。著者は一章に次々に他章を以てするに當つても自ら後を追つて生じて來る問題の關係を失はぬ様に意を用ゐたので有ります。各章を獨立のものとして此所彼所抜き出して見ても差支は有りませんが、全部の通讀、能ふべくんば順序に随つての全部の通讀は著者の最も希望する所で有ります。

坪井正五郎

人類學叢話目次

目次	(1)
廣く人類を見よ……………	一
人種……………	一一
何をか人種の別と云ふ……………	二七
諸種族相互の系圖的關係を考へ定める方法……………	四八
諸人種に於ける衣食住の比較的價值……………	六一
野蠻未開人種の智慧……………	七〇
事物變遷の研究に對する人類學的方法……………	九五
玉を好む風……………	一〇一
玉飾りの起原……………	一〇八
進物に添へる「のし」の變遷……………	一一三

土俗品と古器物……………二二

古墳調査は如何なる點に於て人類學を益するか……………二二八

石器時代遺跡實査は人類學上如何なる利益ありや……………二三六

古代石器研究の興味……………二五〇

日本最古住民に關する豫察と精査……………二六二

人類起原諸説……………二七三

人類學眞正の性質……………二八九

諸種の雜誌に掲載されたる人類關係の諸意見に就て……………二〇一

如何にせば人類學を自修し得べきか……………二二八

人類學研究者の幸福……………二三〇

同上口繪目次

第一圖版 世界諸人種の數例

第二圖版 人類學教室後庭

第三圖版 未開種族婦人の美醜(寫眞)

第四圖版 髮長き北アメリカ土人(Woodによる)

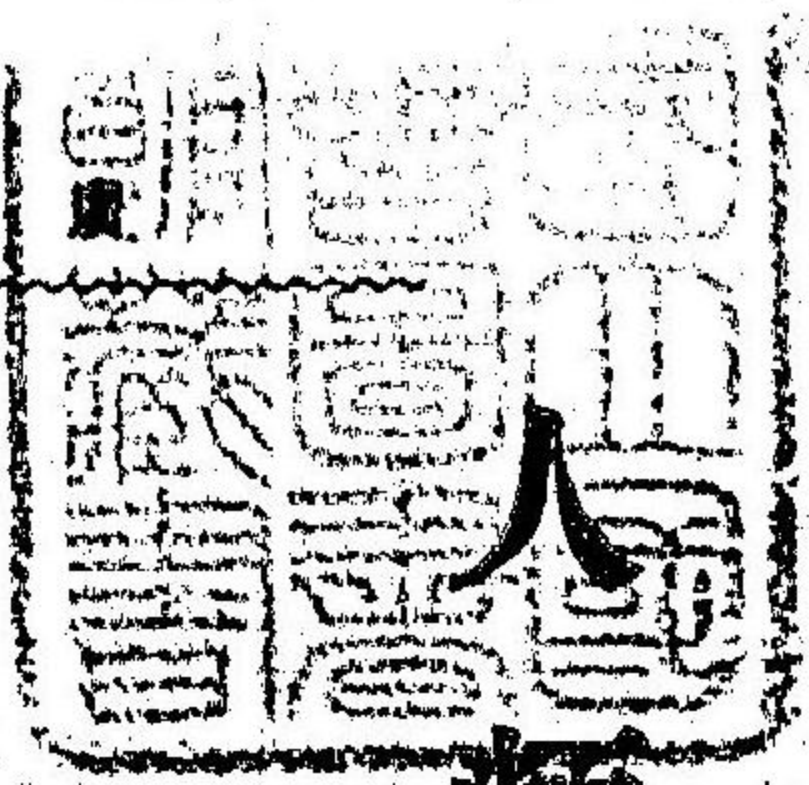
大小のアフリカ土人(Stanleyによる)

ブツシマン駝鳥を捕ふ(Woodによる)

第五圖版 ニューギニー土人捕人器を用ゆ

(Chalmers and Wyatt Gillによる)

目次終



人類學叢話

理學博士 坪井正五郎著

廣く人類を見よ

熱い所の者は色が黒い、寒い所の者は色が白い、人類の皮膚の色は氣候の如何に由つて異なるもの、とは能く人の云ふ所でありませんが、世界の人類を見渡すと此考への誤つて居る事が分ります。

昔ヨーロッパ人が地中海の北に住む自分達の色の白いのと地中海の南に住む様々の種族の色の黒いとのを比較して斯かる考へを起したのは無理も無い事ですが、今は地理學的智識が甚しく廣がつて、諸地方住民の事も精しく知

口繪に付いて

巻首に在る數葉の圖は主として本文の記事と對照する様に撰んだものではありますが、自ら諸人種の體質風俗の異同をも示して居りますから、二重の役に立て、彼れ此れ比較する便を謀らんが爲め特に一纏めにして置く事にしたので有ります。(著者)

れて來たので、比較の材料が大に増加し、随つて古い考への誤りたる事が悟られる様に成つて來たので有ります。ヨーロッパ人の古い考へを捨て、新たに事實を調査して見ると、次の通りの事が知れます。

北半球に於て最も寒い所に生活して居るのはアメリカのエスキモーで有りますが、彼等の皮膚は褐色で有ります。ヨーロッパ人よりも北の方に住んで居るので有るが、ヨーロッパ人の様に白くない、ヨーロッパ人よりも白い杯と云ふ事は決して決して無い事です。南半球に於て最も寒い所に生活して居るのは南アメリカのテラデルフューゴ人で有りますが、彼等の皮膚も褐色で有ります。此地よりも氣候の溫和な所に住む者に比して白いと云ふ事は有りません。南アメリカの西部には氣候如何に關はず同じ様に褐色な者が分布して居ますし、アフリカの南方には殆ど同じ場所、随つて同じ氣候の地に、黄色のホツテントツトと黒色のブツシマンとが住んで居ます。膚色相異の原因

は姑く措き、寒地の者は白い熱地の者は黒いと云ふ事は斷じて誤りで有ると云はなければ成りません。

文明人の容貌は美しい、野蠻人の容貌は醜い、種族の文野は自ら容貌に顯れる、とは能く人の云ふ所で有りますが、廣く世界の人類を見渡すと此考への誤つて居る事が分かります。

一體美だの醜だのと云ふのは主として感情上の話して、其標準も種族に由つて異同が有りますから、或る者に對して美醜の判断を下すと云ふのは元來難い事では有りますが、假りに我々の常に思つて居る所を當て嵌めて見ると仕ませうに、文明人中にも随分醜い者の有ると云ふは争ふべからざる事實で有りますし、其醜い者の中には野蠻人の或る者よりも醜い者さへ有ります。眼を轉じて野蠻人を見ますに、チーストラリア土人や、アフリカの子グロは如何にも氣味の悪い顔をして居ますが、南洋ポリネシアの土人や北アメリカ東

部の土人の如きは中々立派な顔立ちをして居ます。彼等の中には文明人中の普通の者より立ち勝つた容貌の者が有ります。我が臺灣の生蕃杯も人の首を取つて各自其勇を誇る風が有ると云ふ様な所からしてさぞ怖しい面相をして居るだらうと思つて居る人も有る様ですが、實は誠に溫和な面付きをして居ます。野蠻人とさへ云へば一途に鬼の様な面でもして居るかの如くに考へるのは大なる誤りで有ります。

顔面角度は文明人程直角に近く、野蠻人程度数が少い、とは能く人の云ふ所でありませんが、廣く世界の人類を見渡せば必しもさうで無い事が分る。

顔面角度とは人の顔を横から見た時、額の前面と上顎前面とに觸れて畫かれる線と、水平の線との間に作る所の角度を云ふので有りますが、此二つの線の引き方、特に水平線の引き方、即ち何れの點と何れの點とを過ぎる様に引くかと云ふ事が研究者に由つて區々に成つて居ますから、別人の行つた諸種

の測定をば方法如何の穿鑿もせず直ちに對照比較する事は固より爲すべからざる事で有ります。そこで同一人が同一方法を以て諸種族の頭骨に付いて測つた結果を度数多少の順序に従つて摘記して見るのに次の通で有ります。

カナリヤ住民	(八十一度)	パリス人	(七十八度)
タスマニヤ人	(七十六度)	支那人	(七十二度)
エスキモー	(七十一度)	マレイ人	(六十九度)
チーストラリヤ土人	(六十八度)	子グロ	ロ(六十六度)

パリス人はカナリヤ人に劣り、支那人はタスマニヤ人に劣りマレイ人はエスキモーに劣り、子グロはチーストラリヤ人に劣ると云ふのが果して開化或は智力の順で有りませうか、斯く例を擧げた以上は顔面角度が必しも種族の優劣を示すもので無いとの事は最早明瞭で有りませう。

女子の髪の毛は長い、男子のは短い、頭髮の長短は男女の性に由るもので有

る、とは能く人の云ふ所で有りますが、廣く世界の人類を見渡すと斯かる斷言の正しく無いと云ふ事が悟れます。

日本に於ては女子の髪は誠に長い。マレイ地方に於ても同様。ヨーロッパ諸國に於ても男子の髪に比して女子の髪が長い。併し乍らパプア種族の女子は男子と同様其髪が捲上つて居て此點に於ては性の區別が認められない。否男子の方が頭を色々に飾つて居るので、寧ろ長い髪を持つて居る様に見える。フィリピン群島のアエタ種族でも、アフリカの沙漠以南の土人でも女子の髪が男子のより長いとは云へない。一方に於ては斯く女子の髪が長く無いと云ふ事實が有ると同時に又一方に於ては男子の髪が長く延びると云ふ例が有る。日本の男子はどの位の長さ迄髪を伸ばし得るか、正確な見聞が有りませんが、散髪が自然の長さでも無く、チヨン鬚が自然の長さでも無く、肩を覆ふ様に仕て置くのさへも自然の長さでは無く、

髪は自然の長さは之を超して居るで有らうと云ふ事は、十分推測するを得ます。支那の男子は誰も知る通り髪を延ばして辮髪に仕て居ますが、入れ毛や編み込み絲を取り去つても随分長く背後に垂れます。

臺灣土人、即ち臺灣居住の支那種族の男子中には頭髪の末端が膝に達する者さへ有るとの事です。北アメリカ東部土人の男子に在つては頭髪が極めて長く、甚きに至つては一丈に餘る者さへ有つたとの事です。されば女子は髪が長い男子は髪が短いとは決して人類全體に當て嵌まる言では有りません。

男子にはひげが有る、女子にはひげが無い、ひげの有無は男女の別の一つで有る、とは多くの人の思つて居る所でありませんが、廣く世界の人類を見渡すと之亦誤りて有るとの事が知れます。

男子でもマレイ地方の者はひげが薄く、北アメリカ本部の者は殆ど無く、純

粹のエスキモーやチュクチに至つては絶無と云つても宜い位で有ります。扱女子の方は如何かと云ひますに、口邊に入れ墨を施す爲め餘り明瞭では有りませんが、アイヌの女子中には髭の生える者が有る。チーストラリヤ土人の女子に於ても間々髪を見る事が有る。最も妙なのはフランスの女子の髭で、日本男子の薄髭位に生える者さへ有ります。身長の話してはヨーロッパ人は丈が高い、日本人は丈が低い、高い方が優等らしいからどうぞ夫れに追ひ付く様に仕度い、とは能く人の云ふ所でありませんが、廣く世界の人類を見渡せば身長の高低と智力の優劣との間には何等の關係も無いとの事が明かに知れます。日本人に比べればヨーロッパ人の方が正しく丈高では有りますが、此ヨーロッパ人に比べては南洋ポリネシア土人の方が高く、それよりは又南アメリカ、パタゴニヤ土人の方が一層高い。然るに智力に於てはポリネシア土人がヨーロッパ人に勝つても居らず、パタ

ゴニヤ土人がポリネシア土人に勝つても居りません。他の據が有つて身體長大を好むと云なら格別、丈の高いのを以て直に智力優等の徴候であると考へるは誤りと云はなければ成りません。次に全世界を通じて丈の最も低いのはエスキモーで有るとは多くの人の信じて居る所でありすが、廣く人類を見渡すと其事實に反して居る事が分かります。エスキモーは勿論身體の大きい者では有りません。併し我々日本人と同じ位です。否或地方の者には日本人よりも大きな者が有るのです。世界には彼等よりも長大な種族が幾らも有りますが、又彼等よりも短小な種族も有ります。今知れて居る所では中央アフリカに於てスタンレイの發見した所謂スタンレイス、ドワーフ杯が最も小さいのでありまして、其身長は成長した男子に於ても僅かに四尺に達せぬ位であります。此他アツカと云ふ種族も短小ですが其

住所は矢張り中央アフリカで有ります。

以上は體質上の事に付いて世人の思ひ誤つて居る點の二三を指摘したのであります。風俗習慣に關する事に至つては更に甚しい誤解が行れて居ります。今夫れ等に論及する事は止めますが、限られた見聞に基いて立てた説の如何に廣く當て嵌まらないものであるかとの事は推察するに難くなからうと思ひます。日本人の事を論ずるのに其標準を日本人に求めるのは宜しい。ヨーロッパ人の事を論ずるのに其標準をヨーロッパ人に求めるのも妨げは有りません。併し乍ら日本に於ての事實若しくはヨーロッパに於ての事實に據て世界の人類を律しやうとするのは不條理極まる事で有ります。苟も人類に付いて論ぜんとする者は、其事の教育に關すると、政事に關すると、宗教に關すると、實業に關するとを問はず、眼を人類全體に注がなければ成りません。「廣く人類を見よ」此語は何人の爲にも一つの戒めとするに足ると信じます。

人 種

人種 (Race) と云ふ言葉は好く人の遺ふ所でありませんが、如何なるものを一つの人種と云ひ、如何なる相違を人種の別と云ふのであるか、推し究めて見ると甚解かり悪く成ります。日本人種支那人種杯と云ふ稱へが有るかと思へば又亞細亞人種蒙古人種黄色人種チユラニヤン人種杯と云ふ稱へも行はれて居る。亞細亞人種と云ふ事が、アジヤなる名を以て呼ばれて居る大陸及び其の近傍諸島に住する人類全體を指すのならば、日本人も支那人も無論亞細亞人種たるに相違ありません。言ひ換へて見ると亞細亞人種の中に、日本人種と支那人種が在る譯であります。大きい團體も人種と云ひ、其中に含まれて居る小さい團體も人種と云ふとすれば、人種なる名稱の範圍は大小の定まりが立つて居ないと云はなければ成りません。假りに人種なる名稱は大きな團體

許りに付けるものとしましても、彼の亞細亞人種と云ふ稱へと蒙古人種と云ふ稱へと黄色人種と云ふ稱へとチユラニヤン人種と云ふ稱へとは必しも同一範圍のものとは云へず、矢張りどれだけが一つの人種だか不明であります。人種と云ふものを日本人種支那人種と云う様に狭く見れば日本と支那人とは人種を異にするると云はなければならず、亞細亞人種歐羅巴人種と云ふ様に廣く見れば日本人と支那人とは人種を同くすると云はなければ成りません。日本人と支那人とは別人種と申しても宜し。但し此場合には人種と云ふ名が小團體に負はせて有るのである。日本人と支那人とは同人種と申しても宜し。但し此場合には人種と云ふ名が大團體に負はせて有るのである。どれ程が小團體か、どれ程が大團體か、是亦據とすべき標準は存在して居りません。人種とは抑も如何なるものを指すのでありましようか。從來の慣用に從つて申しますれば、人種とは如何なる方法かに據つて分類し

た所の人類の一群たるに過ぎません。故に分類の方法に因つては諸群の大小が一樣に成らない事も有る譯でありますし、又一群一群の區域が廣くも成り狭くも成る筈であります。日本人と支那人とが別人種と見做されるのも、同人種と見做されるのも、歸する所は人類分類の方法如何に在ると申して宜いのであります。若しも人類分類の方法と云ふものが唯一つしか無いものならば、人種の異同に關する論は單に見解の論と成つて仕舞ひます。併し實際に於ては人類分類の方法は中々一つや二つに限られては居りません。人種問題攻究者にとつては實に煩はしい事と申すべきであります。凡そ分類と云ふ事には二つの別が有つて、各々目的に從つて得失を異にして居ります。其第一は便宜分類で此に又常識分類、人爲分類の別が有ります。先づ常識分類の事から述べませう。常識分類とは通常の智識を有する者が特別に注意する事無しに思ひ付く可き分類の事で、書籍を本綴ちと假綴ちとに

分つとか、植物を木と草とに分つとか云ふ類であります。全世界の人類をば其居住地に従つて亞細亞人種、歐羅巴人種杯と云ふ様に分ち、或は中央と東西南北とに配して分つが如きは、人類の常識分類であります。次に人為分類と申すのは、何か土臺を据えて夫に従つて部類分けをする事で、譬へて見れば、表紙の色を土臺として書籍を類分けするとか、花の形を土臺として植物を部類分けするとか云ふ様なもの。人類分類の種類中には此の如き人為的のものが極めて多いのであります。

第一、皮膚の色を主なる據として人類分類を企てたのはリンネウス(Linnaeus)であります。其人種名目は左の通り。

- 白色ヨーロッパ人種 (Europæus albus)
- 赤色アメリカ人種 (Americanus rubescens)
- 褐色アジア人種 (Asiaticus fuscus)

黒色アフリカ人種 (Africanus niger)

第二、毛髮の性質を以つて人種分けの土臺としたのはハックスレイ(Huxley)。其名稱は

- 柔毛人種 (Molrichi) 滑毛人種 (Leiostrichi)

第三、皮膚の色と毛髮の色とを據として人類を部類分けしやうと仕た學者も有る。ドマリウス、ダロイ(D. Omalius d'Halloy)は其一人。

第四、齒の大小、尙ほ正しく云へば齒の生へて居る場所の長短を土臺として人類を分つ事が出来る、とはフラワア(Flower)の所説。其名目は

- 小齒人種 (Microdont) 例 イギリス人
- 中齒人種 (Mesodont) 例 支那人
- 大齒人種 (Megalodont) 例 ナーストラリヤ人

第五、頭の形を以て人種別を設けた人もある。(Zenne)其種類は。

高頭人種 例 ヨーロッパ人、アメリカのチヨクタウ人

廣頭人種 例 マレイ人、アメリカのカリブ人

長頭人種 例 ゼグロ、アメリカのインカス人

第六、頭の形と顔の形とを人種別の土臺としたのはレツイウス(Retzius)で、其名稱は次の通り。

長頭直頭人種 (Gents dolichocephalae orthognathae)

廣頭直頭人種 (Gents brachycephalae orthognathae)

長頭斜頭人種 (Gents dolichocephalae prognathae)

廣頭斜頭人種 (Gents brachycephalae prognathae)

第七、頭骨發育の種類で人種を分けた人も有る。(Gratiolet) 其人種別は

前頭骨的人種 例 ヨーロッパ人

顛頂骨的人種 例 アジャヤ人の多數

後頭骨的人種 例 ゼグロ

第八、心理上の性質を據として人類の部類を定めたのはグルーム、ナビヤア。(Groom Napier) 其部類の名目は左の通り。

智德的人種 (中に二部を置く)

感情的人種 (中に二部を置く)

以上は只彼様な分ち方も有ると云ふ例を示したのに過ぎないので、決して人為的人類分類を擧げ盡したのではありませんが、人類諸性質中の或るものを選んで土臺とする時には、其土臺次第で幾様に分類を設ける事が出来るとの事には是丈でも充分は解らうと信じます。

次に自然分類と云ふものがあります。是は天然自然に存する關係を明にする所の分類で、前に述べました常識分類の様に一寸考へれば直ぐ解かると云ふ譯には參らず、又人為分類の様に便宜上人々の隨意に致すと云ふ譯にも參り

ません。或品物の自然分類を仕様と云ふには、其品物の其性質を成る可く廣く觀察して總體に關する知識を有して居ると云ふ事が必要であります。申さば記載事項を熟知した上で書籍を分類し、發生構造を精査した後、植物を分類する様なもの。

自然分類中には又、諸性質の類似と云ふ事を標準として品物を分合するのと本末を糺して品物を配置するのがあります。

人類の自然分類にも矢張り此二様の別が有つて、ラタム (Latam) は是に金石學的主義の分類、動物學的主義の分類と云ふ名を付けましたが、私は甲を類聚的自然分類、乙を系圖的自然分類と申す方が意義が明瞭で有うと思ひます。左に人類の類聚的自然分類の例を二つ三つ擧げて見ませう。

ブルメンバツハ (Blumenbach) は世界の人類中には五つの主なる種類が有るとして是等に

モンゴリヤ人種 (Mongolian)

アメリカ人種 (American)

コーカシヤ人種 (Caucasian)

マレイ人種 (Malay)

エシチビヤ人種 (Ethiopian)

の名を與へました。

ラセペード (Lacépède) は右の五つに

極北人種 (Hyperborean)

を加へて人類中には六つの種類が有ると致し、

キエヴィエ (Cuvier) は全體を二つに減じて

モンゴリヤ人種 (Mongolian)

ネグロ人種 (Negro)

コーカシヤ人種 (Caucasian)
と名付けました。

ハックスレー (Huxley) の作った分類の事は人為分類の部にも記して置きましたが、同氏は別に類聚的自然分類をも設けたのであります。其人種名は

チーストラリヤ人種 (Australoid) エジプト人及びドラ
ジイデヤンをも含む

ネグロ人種 (Negroid)

モンゴル人種 (Mongoloid) アメリカ土
人をも含む

白色人種 (Xanthochroic)

ダラス (Dallas) は人類を

白色人種 (Leucochroi)

間色人種 (Mesochroi)

黒色人種 (Ethochroi)

の三つに分けました。名稱は色に従つて付けてありますが、分合の據は膚色のみならず身體諸性質の比較の上にあるのであります。

類聚的分類の例は是に止めて次に系圖的分類の事に移りませう。類聚的分類に於ては、單に諸性質の似通ひて居るものを一纏め一纏めにするると云ふことを目的として居るので、諸性質の似通ひて居ると云ふのは何に基するかは推究致しません。之に反して、系圖的分類に在つては、諸性質に異同の有るは系統上の關係に由る、類似の度の強いのは緣故が近く、類似の度の弱いのは緣故が遠いので有る、と考定して居るのであります。人類の系圖的自然分類とは即ち本源の人類が如何に枝分れし、其枝が又如何に小枝に分れたかと云ふ事を示す分類で、雜種に關する論さへ取り退ければ、一樣に歸して仕舞ふべき筈のものであります。常識分類は人々の感じを本とする事故必しも一通りとは云へず、人為分類は固より隨意に作るを得るが故に限りの無いもの、

自然分類中でも類聚的の方は標準が確定して居ませんから幾様にも成ります。系圖的自然分類は一個人の血統調べと同様、正しいものは一つしか無い筈であります。

人類中の系圖調べをする人々の中には雜種に付いての考へを異にする者もありませんが、是は事實の真相が探り悪いのですから、姑く一致は望まれない事と致し、扱大體の系圖論の方を見渡しますと、主意に於ては何れも變る所はありませんが、何を據として關係の多少、緣故の遠近を判斷するかと云ふ點に於ては分類者の意見に違ひがあります。或る論者は體格特に頭骨の形狀が系圖調べの最も好い探りて有ると云ひ、或る論者は言語特に文法上の組織が系圖調べの最も好い探りて有ると云ひ、頭骨の分類は頭骨の分類で宜し。「是即ち人類の分類で有る」と云ふのは境を越えた話と云はなければ成りません。言語の分類も言語の分類で宜し。「是即ち人類の分類で有る」と云ふのは

同じく當を失して居る。人類は頭骨を有し、言語を使ふ活き物ではありませんが、決して頭骨ではありません、亦決して言語ではありません。頭骨の調べ或は言語の調べを人類の系圖的自然分類の一つの據とする分ならば固より異論の有らう筈はありませんが、頭骨に重みを置き過ぎる人と、言語に重みを置き過ぎる人との有る爲めに、元來一樣に歸して仕舞ふ可き系圖的自然分類も人に由つて様々に考へられて居るのであります。左に系圖調べの主意に適つて居ると思はれる分類の一例としてブリントン (Brinton) のを掲げませう。

ヨーロッパ、アフリカ人種 (Eurafican) アジヤ西部の住民をも含む

南方アフリカ人種 (Austafican)

アジヤ人種 (Asian)

アメリカ人種 (American)

島嶼沿海人民 (Insular and Litoral Peoples)

初めの四つは本源人類の大分流と認むべきものでありますが、五番目のは是等と同等に位して一人種と見做すべき價値を有して居るものではありません。南洋諸島マレイ諸島印度一部等の住民等を總括して假りに一纏めとしたのでありますから、此五番目の一群には單に人民と云ふ名が與へて有るのであります。

既に申して置きました通り、古來人種別を企てた人々は中々此所に擧げた位な少数ではありません。今から三十餘年前(1863)にハント(Hunt)が英國理學獎勵會に於て致した演説に由つて見ましても左の通りであります。

Ephorus of Cuna, Buffon, Linnæus, Gmelin, Herder, Voltaire, Blumenbach, Lacépède, Duméril, Maltebrun, Cuvier, Virey, Hunter, Lawrence, Metzan, Bory, Desmoulins, Prichard, Lesson, Fischer, Morton, Latham, Hombron, Jacquinot, D'Omalius d'Halloy, Pickering, Burke, Knox, Agassiz, Crawford, Isidore, Geoffroy St. Hilaire, Gratiolet.

ブッフアンを人類分類者の員に加へたのは不穩當であります。此表の中には Bernier, Leibnitz の名が見えませんが、差引き大差はありません。此時以來の人類分類者も少からぬ事であり、其幾分は前に例として引いて置きました。

人種別なるものは此の如く幾通りも有るので、或る人民を採つて其何人種に屬するかを判断しやうと云ふには、豫め誰の人種別に従ふとか、如何なる主義の分類を用ゐるとか、新たにどう云ふ分ち方を立てるとか云ふ事を明示して置かなければ成りません。特に或る人民と他の人民との人種の異同を論ずるに當つては、是非とも人種と云ふ事の觀念と分類の意見を確定して置かなければ成りません。同一の人民も分類の如何に由つては色々異つた名稱の區分中に入れられますし、同一の名稱も分類者の考へに従つては種異つた團體に負はせられますから、是等に關する注意が薄い時には實に失

望すべき混雜に陥ります。世界の人類中には二つの別が有ると云ふ人も有り、三つの別が有ると云ふ人も有り、四つと云ふ人も、五つと云ふ人も、六つ七つ八つと云ふ人も、十一、十五、十六、二十六、六十と云ふ人も有り、又六十三の別が有ると云ふ人もあります。然れば一つの人種と云ふもの、範圍は分類次第で廣くも成り狭くも成るので、極嚴正に申せば單に某の人民と某の人民とは同人種か別人種かと問ふのは意味の無い事と云つて宜しい。併し普通の場合では、人種なる名稱は體質言語風俗習慣等多數の點に於て一致して居て、相互に同類と見做すべき人類の群に與へられて居るのであります。近頃頻りに人種論流行の兆しがありますから一般讀者の便宜を謀り、且つは術語濫用の弊を除く目的を以て此所に「人種」の一篇を草した次第であります。

何をか人種の別と云ふ

人種の別即ち異地方住民相互の間に存する相異は様々ありますが、大別すれば、先天性相異と後天性相異の二類と成ります。先天性相異とは人々が持つて生れた性質例せば頭の形とか皮膚の色とかの相異、後天性相異とは人々が生れてから周囲の社會に影響されて得る處の事柄例せば言語とか信仰とか風俗とかの相異であります。

人類は何所に於ても個々別々に生活しては居らず、幾らか群を作つて居りますから其有する性質中には生れ付きのもの、他に故意に學び又知らず識らずの間に覺えた事柄も混じて居る事勿論であります。併し乍ら日本人の赤兒をイギリスへ移して育てあげ、イギリス人の赤兒を日本へ移して育て上げたならば如何なる事が起るでございませうか。日本人の赤兒は成長した後も先天性

諸性質を失はず儘に日本人で有るが後天性諸性質に於ては日本人を離れてイギリス人同様に成るてありませう。イギリス人の赤児の場合も其れと同じ道理で先天性諸性質より云はゞ明かにイギリス人、後天性諸性質では日本人と變らないと云ふ様に成るてありませう。是れは一個人としての變化を云つたのでありますが政事の都合とか教育の結果とか社會の風潮とかの爲に、一地方に行はれて居た言語や信仰が廢たれて、他地方に行はれて居るものが入り込んで來ると云ふ事もあります。此時には其地方の住民は從來の先天性諸性質は舊の儘で有り乍ら、後天性諸性質に變化を受けたのである。アイヌ間には今でも日本語が行はれて居りますが、行く行くは日本語計りで話す様に成るかも知れません。アイヌ全體が日本語を話したとても體格が變らう筈は無い。我々はイギリス風に育つた者でも先天性諸性質が儘に日本人ならば、其者を日本人種に屬する者と認める。我々は日本語を話しても先天性諸性質が

儘かにアイヌならば其者をアイヌ人種に屬する者と認める。後天性諸性質は區別の立たぬ程に眞似る事も出来るが、先天性諸性質はさうは行かない。して見ると、人種的性質に先天後天の二類が有つても、異地方住民異同判別の上から云ふと其價値は同様とは申されません。先天性諸性質とても固より絶對的に變化が無いのではありませんが、後天性諸性質の様に容易には變化しないのであります。

凡物の異同を判別し、相異の程度を確知しやうと云ふには、比較する物の性質中で成るべく變化しないものを選び出すのが必要であります。絹布と綿布との判別には組織の原たる糸の性質を調べなければなりません。布の幅とか長さとか、又は染め色、紋様杯は人意を以てどうにでもする事の出来るもの故、二種の織り物の比較に付いては重きを置く事を得ない譯であります。異地方住民の異同或は相違の程度を明かに仕やうと云ふに當つても此考へを離

れては成りません。人種の別と稱へられるもの、中で先天性諸性質が動きが
 少ないと知れたならば、此方に重きを置くが當然であります。一體人種の別
 と云ふ事の考へは、人類を目的物として起つたので、人類の働きを目的物と
 して起つたものではありません。夫れ故に人類其者の生れ付きとして有して居
 る性質が主で有つて、人類の社會に應じて爲す處の働きは客で有るのです。
 先天性諸性質は動きも少いし、又人種の別中で主位に置く可きものであると
 すれば、先づ此方の事から述べるのが順序でありますが、其前に一寸一言し
 なければ成らない事があります。夫れは何かと云ふと、著名なる相異が必し
 も肝要なる相異では無いと云ふ事でありませう。

人種的相異の中で最も著明なのは恐らく言語でありませう。言語不通と云ふ
 事は異地方住民の出會つた時一番奇異に感ぜられる事に違ひ無い。身に纏ふ物
 の有無、又は衣服の仕立方の相違杯も直に目に着く點であります。是等は實

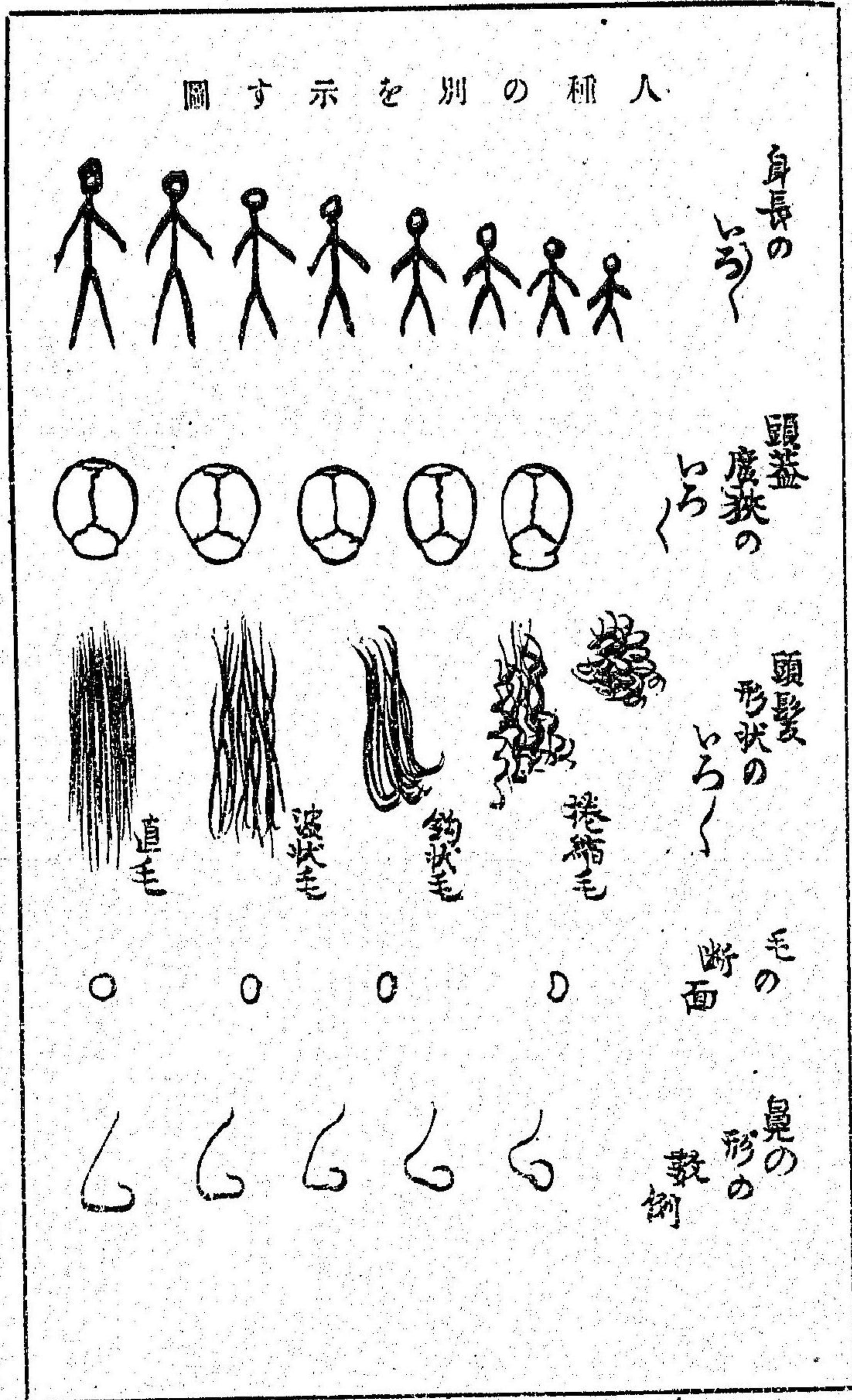
に著明なる相異ではあります。既に申しました通り後天性のもので、人意
 を以て變へる事が出来る。即ち斯る相異は先天性のもの程に肝要では無いの
 であります。先天性相異のみに就いて云つて見ても其通り。身長の如きは隨
 分著しい違ひを現はすものであります。實は人種的相異として價値の多い
 ものではありません。以上の注意を仕て置いて愈いよ相違點の記述に掛かり
 ませう。

皮膚の色 世界諸地方の住民を見渡すのに、或は多くのヨーロッパ人の様に
 色の白いものもあり、或はアフリカの子グロの様に色の黒い者も有り、種々
 中間に位する色の者も有る。

一體皮膚の色の相異は何に原因するかと云ふに、此事を考へる爲には是非と
 も皮膚の色其者からして調べて掛かなければ成りませぬ。皮膚の色と云ふ
 ものは繪の具でも塗つた様に皮膚の表面が染まつて居るのであるか、又は表

皮の下に何か色附いた物が有つて夫れが透き通つて見へるのであるか、顕微鏡の力を藉りて精査して見ると、表皮と真皮との境界の所に茶褐色の點が有つて、此點の夥しく重なつて居る時には皮膚が黒く見へるし、夫れよりも量が少ければ栗色に見へ、モツト少ければ黄色に見へ、僅しか無い場合には其色が表面からは認められないので有るとの事が分かる。表皮は半透明で有つて、之を隔て、表面に見へ透くものは、此の茶褐色の點即ち色素のみでは無い。内部組織の白いのも、血の赤いのも、見へる。併し固より別々に見へるのでは無く數種の色が異つた分量で相混交して見へるのでありますから、其結果は桃色に成つたり、白色に成つたり、薄黄色に成つたり、栗色に成つたり、黒色に成つたりして、現はれるのであります。然れば所謂皮膚の色は表面に塗つた繪の具の色と云ふ様な單一なものでは無く中々混み入つたものであります。皮膚の色の相異と云ふ事を尙ほ精しく云へば、色素の多少、諸種

の色の雜ざり方の相異と云ふ事に成りますが、夫れ等を引き纏めて、現存する周圍の有様の影響杯と容易に云ひ放つて仕舞ふ事は出来ません殊に日に焼けると云ふが如きは皮膚の表面が色付くに過ぎないので深い處まで變化は及ぼしません。皮膚の色は諸地方住民生れ付きのもので有るとしか云へないのであります。皮膚の色の如何は主として色素の分量如何に由るので、決して白黄黒杯と各々別々に染まつて居る様な譯ではないのでありますから、異地方住民は皮膚の色を異にするると云ふ事を更に正しく云へば異地方住民は色素の分量を異にするると申さなければ成りません。即ち此色素の分量如何が人種の別の一條目として算へられて居るのであります。毛の性質 異地方住民の毛は、一本一本の形に於ても太さに於ても、剛さに於ても、色に於ても、違ふ事があり、又場合に由ると、生へ方に於ても、違ふ事があります。



(著者 畫)

一本一本の形で云ふと、頭髮には眞直なもの、うねうねとした波形のもの、先きの曲つた鈎形のもの、チリ／＼と縮れたもの、別が有つて、其横断面を顯微鏡で見ると、眞直なのは圓く、波形鈎形のは橢圓、縮れて居るのは扁平に成つて居ります。我々日本人の頭髮は誰も知つて居る通り眞直でありますが、横断面は最も正しい圓形を呈して居ります。ヨーロッパ人の頭髮は波形或は鈎形、子グロの頭髮は縮れて居る。頭髮の直毛であるか波状毛であるか、鈎状毛で有るか、縮毛で有るかと云ふ事は随分肝要な人種的相異と認められて居ります。

毛の最も太いのはチベット人、最も細いのはフィン。ヨーロッパ人の毛は柔く、アメリカ土人の毛は剛い。毛の色には薄黄色、黄金色、鼠色、栗色、黒色等の別が有る。

頭髮の生え方には、日本人の如く、皮膚に對して斜なものもあり、ホツテント

ツトの如く、皮膚に直角を爲して居るものも有る。多くの場合に於ては頭髮は一樣に分布して居りますが、子グロやパプアンに在つては此所彼所に固まりを作つて居ります。マレイ地方の住民は、一體に口邊の毛や體毛が薄いのでありますが、北海道のアイヌや印度のトダ杯は甚だ毛深いのであります。太さ以下の諸性質は、一地方の住民の事を精く記述するに當つては入用でござりませんが、今日の所では人類全體の部類分けをすると云ふ様な時分に一つの根據として用ゐると云ふ程に肝要なものとは認められて居りません。

鼻の形 鼻の形に付いても諸地方住民の間に異同があります。或る者の鼻は摘み出した様に高くつて幅が狭く、随つて鼻の孔は前後に細長い。或る者の鼻は押し付けた様に低くつて幅が廣く、随つて鼻の穴も大きい。多數のヨーロッパ人は前の部に屬し、子グロ杯は後の部に屬するのでありますが、是等の中間に位する形の者も幾らも有つて、日本人其他多數のアジャ人は此部に

屬します。右は生體に關しての話であります。頭骨を調べても同様の結果が得られます。頭骨を正面から見ると、真中に細長い孔が開いて居る事に氣付ますが、此孔は、云ふ迄もなく、鼻の形を定める一つの元と成つて居ります。此孔が狭ければ、鼻の外形も狭く、此孔が廣ければ、鼻の外形も廣く、此孔が中間ならば、鼻の外形も中間で有ります。此部の上下の長さを百として勘定すると、幅が四十七から四十二位のもあり、五十二から四十八位のも有り、五十八から五十三位のもあつて、是に狭鼻、中鼻、廣鼻の名が與へられて居ります。鼻翼の張り出し方が一樣ではありませんから、此孔の廣狭の都合が必しも生體に於ける鼻の廣狭の度合に一致して居るとは申されませんが生體の調査も、頭骨の調査も、一地方住民と他地方住民とが如何に鼻の廣狭に關して異つて居るか云ふ事を我々に告げます。

顔の形 顔の形には二通りの見方があります。一つは突出部の有無の調べ、

一つは正面から見た所の輪廓の調べであります。突出部の有無と云ふ事を精しく申せば、頭を眞直に立て、遠方を眺める様な姿勢にした所を側面から見た場合に、上顎が前の方に張り出して居るかどうか、眞向きに顔を見た時に、顴骨即ち眼の下耳の前の所に在る骨が、左右に張り出して居るかどうかと云ふ事でありませぬ。子グロの上顎は目立つて張り出して居る。彼様な顔をば斜顎の顔と申します。日本人の上顎は張り出して居ない。彼様な顔をば直顎の顔と申します。ホツテントツトの顴骨は著しく突出して居る。彼様なものをば顴骨突出の顔と申します。上顎傾斜の多少を精密に示す爲に顔面角度と云ふものを用ゐる事もありますが、人に由つて其起點の選び方や基線の引き方が區々で有つて、混雜を生じ易いから此所には是に關した事は述べません。顔の輪廓には、卵形、橢圓形、下膨れ、方形等の別がありますが、異地方住民比較の上に於ては、前述の突出部の有無程に大切なものではありませぬ。

頭の形 少数の取り退けの他は、何れの地方の者も、男女は或は髪を延ばし或は種々の方法を以て頭を飾つて居ますから、一寸は氣付かない事ではありませぬが、頭の肌の見へ透く場合又は頭骨の得られた場合に注意して見ると、異地方住民の頭には廣い狭いの別の有る事が分かります。髪其他の物で表面からは形が知れなくとも、曲り金を二つ合せた様な道具を用ゐて寸法を取つて見れば廣い狭いは直に知れます。頭の廣い狭いは前後の長さを百として割合を以て示すのが便利であります。是を長廣指數と名付けます。一個人としての極端を云ふと、最も廣いものは百を超へ、最も狭いものは六十位であります。諸地方に於ける平均の上から云ふと、最も廣いのが八十七、最も狭いのが七十の邊であります。人に由ると此指數の大小に従つて廣頭、中頭、長頭の三別を立てたり、廣頭、亞廣頭、中頭、亞長頭、長頭の五類を設けたり致しますが、各部の境が分かり悪いから、直に指數を云ふ方が判然として居

て宜しいのであります。二三の例を挙げれば、チグロが七十三、アイヌが七十七、日本人が八十、フィンが八十四。肉や皮の付いて居る上から測ると、是等を取り去つて骨を直に測るのでは、甲の方が乙の方よりも稍幅廣く成るのでありますが、先づは大差無しと申して宜しい。頭の廣い狭い、尚ほ精しく云へば頭の長廣、指數の大小は人類的性質の一と見做されて居るのであります。

眼の色 眼には白眼と云ふ部分と黒眼と云ふ部分とがありますが、所謂黒眼は必しも黒くない。此色の違ひをば眼の色の違いと稱するので、實は虹彩の色と云はなければ成らないのであります。瞳は誰のでも眞黒であるが、之れは水晶體を透き通して内部の暗黒な所が見へるのに過ぎないから、黒眼の一部の色とは云はれません。虹彩は瞳を取り圍んで居る放線狀の細い線の集りで有つて、其線は悉皆同色でもなく、又一條の線も瞳に近い部と遠い部とで

は色を異にして居ります。彼様な譯故、虹彩の色と云ふのは、虹彩全體一樣に有する色では無く、様々の色が混亂して遠眼には一つの様に感ぜられる色であるのでござります。此事は鏡に對して自分の眼を寫して見れば直ぐに分ります。濃淡諸色の混亂した結果黒い様に見へれば黒と云ひ、鼠色の様に見へれば鼠色と云ふのであります。尚ほ此他に栗色、青色、等の別もあります。異地方住民は眼の色即ち虹彩の色に於ても様々の相異を示して居りますから、此事も人種的性質の一要點と申して宜しい。

身長 人の身の丈は年齢に由つても違ひ、男女に由ても違ひ、生活狀態に由つても違ふものではあります。成長したものゝみを取つて彼れ是れ引き括つて觀察を下す時には、何れの地方の者が高いとか、何れの地方の者が低いとか云ふ事が氣付きます。諸地方成年男子平均身長の数例を挙げれば左の通り。

バタゴニヤ人	五尺九寸	子グロ	五尺七寸
イギリス人	五尺六寸	ゼルマン人	五尺五寸
フランス人	五尺四寸	日本人	五尺三寸
ラツブ	五尺	ブツシマン	四尺六寸

身長の相違は異地方住民相違の一つには違ひありませんが、一地方内でも個人的相異の多いものでありますから、此點一つを取り出しては肝要な人種的性質とは申されません。

眼の形 眼の形には圓いとか細いとか、平らで有るとか、尻上りで有るとか、眼頭に皮襞が有るとか無いとか云ふ様な別が有つて、是も地方々々幾らかの特徴を現はして居ります。

腮の傾き 我々の腮は鉛直に下つて居りますが、子グロのは後の方へ退いた様に成つて居ります。此傾き工合も、地方に由つて何分かの癖があります。

併し此點のみを以て彼れ是れの區別をしようと云ふ程に價値の有るものではないりません。

齒の性質 人の齒は一つの顎に付いて、二對の門齒、一對の犬齒、二對の前白齒、三對の後白齒と部類分けされるもので、上下全數三十二枚と云ふが極まりであります。南洋のニューカレドニヤ土人中には第四の後白齒を持つて居る者が有り、開明種族中には第三の後白齒の缺乏して居る者が有る。又我々に於ては第二後白齒が第一後白齒より小さく、第三後白齒が第二後白齒より小さいのであります。チーストラリヤ土人其他の未開種族中には第一も第二も第三後白齒と同じ大きさに成つて居る。南洋土人やアメリカ土人は一體に齒が大きい。齒の大小を測るには頭の中で何所か成るべく變化の小さな部を取つて比較の標準に仕なければ成りません。夫れで今は頭骨に就て二枚の鼻の骨と額の骨との出會ふ點から、後頭孔の前の縁の眞中迄の距離を測

つて之を百とし、二つの門齒の境目から第三後臼齒の後の所迄を弓弦の様に眞直に測つて、何十何と云ふ割合ひを出す事が行はれて居ります。此調べに従ふと、ヨーロッパ人は一番小さく、我々のは稍大きいものであります。此性質に基いて諸地方の住民に大齒、中齒若しくは小齒の名を與へる事があります。

心理上の性質は、固より先天性の部分をも含んで居りますが、慣らはしと云ふ事に大關係を有して居ります。幼少の頃からアメリカに行つて居て、アメリカの社會で人と爲つた者は、考へがアメリカ流で有るとか、子供の時からドイツに居て、彼地で育て上げられた者は考へがドイツ風で有るとか、云ふ事は好く聞く所であります。又一國人民の氣質でも時に随つて著しい變化をする事もあります。思ふに心理上の性質は身體上の性質程に固定のものではありませんまい。夫れ故に私は人種の事を論ずるに當つては心理上の諸性質をば

主として後天性の部に屬するものと致して居ります。

後天性諸性質中では先づ、言語の事を申しまじやう。

言語 異地方人民の使ふ言語は、各の語詞に於ても違ふ事が有り、語と語との關係に由つて意の有る處を示す方法に於ても違ふ事があります。語詞は數が多いので容易に分類する事を得ませんが、關係を示す方法は概ね三つに分かたれます。第一は語詞の配置に由つて意味の關係を示す法、第二は關係を示す分子を語詞に添へて其用を辨ずる法、第三は語詞の變化に由つて關係を示す法であります。言語の如何、殊に關係を示す方法の如何は通例人種の別として算へられて居るのであります。

宗教、社會組織、風俗、習慣の如きも地方々々で違つては居りますが、人種の別と認める丈の價值は有して居りません。

私は屢ば人種の別としての價值と云ふ事を申しましたが、是は諸地方住民の

異同を識別する爲の特徴としての價値と申す事で、必しも人種的記述を爲すに當つての要不要を意味するものではありません。

今後何事の研究に由つて如何なる特徴を發見するか知れませんが、現今の所では、人種の別として算へ上げられて居る性質の主なるものは、皮膚の色、毛の形、鼻の形、上顎の直斜、頭の長廣の割合ひ、虹彩の色、及び言語であります。そこで此の人種の別と云ふものは根本からして違つて居るので有らうか如何と申しますに、一として左様なものはありません。牛には角があるが馬には角がないとか、雞には雞冠が有るが家鴨には雞冠がないとか云ふ様なのは根本的相違と申して宜しいが人種の別は後天性のもの、他は何れも都合の相異たるに過ぎません。皮膚の色の違ひは専ら色素の多少に由り、毛の形の違ひは其圓さの加減に由り、鼻の形の違ひも、上顎直斜の違ひも、頭の長廣の割合ひの違ひも、皆高まり方とか、膨れ方とか、傾き方とか、延び方

とかの多少に由る者であります。虹彩の色の違ひは、其物の眞の色の違ひと云ふよりは、寧ろ諸色混亂の見方方の違ひであつて、其本を糺せば矢張り細い線の並んで居る中で何色の物が多いか少いかと云ふ事に成ります。言語の違ひに至つては、固より度合の違ひとは云はれませんが、人意を以て變へる事の出来るもの故根本からの違ひとも云はれません。兎に角之を捕へて先天性特徴程に重みを置く事は出来ないであります。

人種の別は度の違ひか、然らざれば人意を以て左右するを得る事の違ひであるとするれば、一地方住民の人種的性質と、他地方住民の人種的性質との間には、判然たる分界線を引く事は出来ない筈であります。出来ない筈であるに、此所から此所迄は何の部であるとか、此位のものは何々に屬させるとか云ふ様な事の行はれて居るのは全く便宜に基いた隨意の處置と云はなければ成りません。自然の關係を申さば人類の先天性諸性質は何れも一續きに連なり合

つて居るのであります。此事實は、一方に於ては人類の一種なる事を示し、一方に於ては人種形成の順序を推究する好根據と成つて居ります。人種的性質の度合の違ひは如何にして生じたか、夫れ等がどうして種々に組み合つて人種と云ふものを生じたか、是等は自ら別問題故此所には述べません。本編の主眼とする所は人種の別とは如何なる者で有るかと云ふ事と是等人種の別は根本的相異で有るかどうかと云ふ事とを明かにすると云ふ點に在るのであります。

諸種族相互の系圖的關係を考へ定める方法

アメリカ大陸の様子が廣くヨーロッパ諸國人に知れてから以來、大西洋を横ぎつて所謂新世界に移住した者が澤山有ります。アフリカの黒人も又彼等に連れて行かれました。斯くてアメリカの地にヨーロッパ風の人類やアフリカ

風の人類が棲息する様に成つたので有ります。支那の漢人も固より純粹な者とは云はれませんが、今では夫れに滿州人が混じて清國人と云ふものを形成して居ります。或はアフリカの南部に於てチランダ人と土人との間に雜種が出来たとか、或は日本人中に他國からの歸化人が交ざつて居るとか云ふ様な事は何れも歴史に由つて知るを得るので、是等數例は歴史調査が如何に諸種族相互の關係を探る役に立つかを示します。記録以外の傳説、文字無き民の口碑の如きも往々參考となる事があります。若しも諸地方住民が各太古からの歴史を精く傳へて居たならば、諸種族の系圖的關係は容易く明かにするを得ましよう。併し實際に於て史傳と云ふ者は人類の經歷に對して比較的僅少の間の事しか告げませんから我々は更に他の據を求めなければ成りません。其一つは風俗習慣で有ります。

一團體の人民が或る事情の爲に幾つかに別かれても、風俗習慣に劇變を生じ

て各部の此點に於て無關係になると云ふ事は有り得べからざる事でありま
す。イギリス人はアメリカへ移住してもオーストラリアへ移住しても故國の
風を守つて居る。彼様な場合には風俗習慣の類似或は一致と云ふ事が、異地
方住民の系圖的緣故を考へる一根據と成ります。イギリス人がアメリカやオ
ーストラリアへ移住した事は歴史として知れて居りますから。風俗習慣の比
較は系圖調べの上に著るしい効は奏しません。之に反してマダガスカルとジ
アヴァとの住民間に存する風習の類似の如きは、體質の類似、言語の類似と
同じく、歴史の傳へない所を明かにして、學者に兩地住民の系圖的關係を推
究する材料を供します。風習調べは實に系圖調べに入用では有りますが、風
習の類似或は一致は必ずしも系圖的緣故の近いのを告げるのではないとの事
を記憶して居らなければ甚しい誤謬に陥る恐れがあります。
風習の類似或は一致と云ふ事は交際上の關係有る爲に起る事も有ります。

我邦に西洋風の行はれるのや支那で漢人と滿人とが殆ど同一の風をして居る
の杯は此類の好例であります。
風習の類似或は一致と云ふ事は同様の狀況に應じて起る事も有ります。支
那の諸地方ドイツの僻村、スペインのグラナダ、アフリカの北端には山腹に
穴を穿つて此所を住居とする人民も有りますが、此等諸人民は系圖的關係が
有るのでも無く、又交通上の緣故が有るのでも有りません。生活に都合の好
い場所で、山の岩が掘り易く、木石等を以て家屋を造る事の比較的困難な所
では自然穴居と云ふものが行はれる譯でありますから、右に申した様な一致
は同様の狀況に應じて起つたものと見て然るべき事でありませぬ。
風習の類似或は一致は偶然の暗合で生ずる事もありません。其一例を挙げれば
休息する時、片足で立つと云ふ奇妙な風が、離れた地方の住民間に行はれて
居る如き事でありませぬ。クインスランド土人は休息する時、片足で立つて他

の足の裏をば立つて居る方の足の膝の邊に押し當て、腰から下をザツトPの字の様な形にしますのであります。スダン地方のバセ人も、ホワイトナイル邊の土人も、アルバートニヤンザ湖に近いゴンドコロの土人も此通りの位置で休息致しますが、此一致を以てオーストラリア土人とアフリカ諸地方の土人との系圖的關係や、交際的關係を説く事は出来ません。又同様の狀況から起つた事として解釋する事も出来ません。

以上申した通り、異地方住民風習の類似或は一致と云ふものは必しも系圖的緣故の近いのを示すのではなく、交際上の關係有る事や、同一の狀況の存する事や、偶然に暗合した事をも告げるので有ります。そこで風習調べを系圖調べの役に立てるにはどう云ふ注意を要するかと申しますに、先づ或る風習の類似或は一致を認めたら最初に斯かることは同様の狀況に應じて起るべき事かどうかと云ふ事を考へなければ成りません。同一狀況の爲め、或は必要

の爲め一致と思はれない場合には、偶然に暗合すべき事で有るかどうか考へる事を要します。而して如何にも偶然の暗合とは見られないと云ふやうな事で有るならば、此風習の一致は交際上の關係の爲め、或は系圖的緣故の爲めに起つたと見て然るべきことであります。二つの中の孰れで有るかに付いては別に判斷の根據を定めなければ成りません。今假りに系圖的緣故の近い甲乙二種族が有ると仕ませうに夫れ等の間には風習上如何なる關係が存するで有らうかと申しますに、甲の有する風習も乙の有する風習も本來同一で有つたものとするれば、第一に多數の事柄に於て一致の點が存すると云ふ事も有るで有りませう。第二に他に對する表向きの事が變つても、家の内の私事は變らずに居ると云ふ事も有るで有りませう。第三に大人の舉動が變つても小兒の遊戯は變らずに居ると云ふ事も有るで有りませう。第四に衣服や住居の表面に見える部分は變つても、腰巻とか便所とか云ふ隠れたものは變らずに

居ると云ふ事も有るで有りませう。第五に物を飾る時の模様の分子及び其配置、又は舞蹈する時の身の動かし方、手の振り方、足の運び方と云ふが如き總て嗜好上の癖と云ふものは久しく變らずに居ると云ふ事も有るで有りませう。實際の結果として生じた風習の一致は數も少く、主として外部の事、表面の事、又大人の行ひと云ふ様な事に限られて居ります。上に述べました諸點に心を留めて風俗習慣の比較研究をする時には、異地方住民相互の間に存する系圖的緣故の遠い近いを探り知る事が出来ませう。

言語の比較研究も亦諸種族の系圖調への役に立ちます。一體言語と云ふものは人々が勝手次第に作り出して用ゐるのでは無く、他人の使つて居るのを聞き覚えて用ゐるので有りますから、随分古い時分から傳へ傳へて今日に至つて居るので有ります。假令如何なる遠方へ移住したからと云つて、一旦覺え込んだ言語を急に忘れたと云ふ筈は有りませんから、曾て一團體を形成し

て居た人民が幾つかに別かれれば、別かれたもの相互の間に言語上の一致が存すべき事で有ります。夫れ故に言語の類似或は一致は往々異地方住民の系圖的關係を示す事が有ります。併し次に列擧する様な色々な場合が有りますから、重みを置き過ぎない様に注意しなければ成りません。

名詞の一致は一種族が他種から借り用ゐるのに起因する事が有ります。我々が平生使つて居るランプだのパンだのと云ふ名詞の如きは手近な好い例で有りませう。

名詞特に鳥獸の名の類似は鳴き聲を示すのから起る事も有り得べき事で有ります。

何語に就いて考へて見ても、言葉の數と云ふものは實に夥しいもので有りますし音の種類は限られて居るので有りますから、多數の言語を彼れ此れ比べて居る中には偶然似たものを發見する事も有りませう。日本語の「にひ」とイ

ギリス語の「ニュー」、日本語の「ひらつたい」とイギリス語の「フラット」と音の似通ふが如きも其例で有ります。

自然の音を真似たものでもなく、偶然の暗合にしては例が多過ぎると云ふ様な時分には、甲乙二語の類似或は一致は、一方が他を借り用ゐたので有るか然らざれば之を用ゐる種族相互の間に系圖的の繋がりがあると認めなければ成りません。其孰れで有るかを判断するには言語以外のもの、調査結果を参考するのが必要で有ります。

通例身體の部分の名稱とか、親族の名稱とか、火や水の如き生活上大切なもの、名稱とか、代名詞とか、數を示す言葉とか云ふ様な、如何に開化下級の時分に於ても苟も人類が或る團體を形作つて、言語を使用する以上は有して居さうな言葉の一致又は類似と、或る連続した思想を云ひ表はす爲には、必しも同じ順序に従はなければ成らぬと云ふ道理は無いのに、言葉の排列法即

ち文法が一致して居たり、類似して居たりすることとは、是等の言語を使用する者の間に系圖的緣故の存するのを告げると認められては居りますが、マダガスカルに住居する子グロが本來のバンツ語を捨て、マラガシイ語を使ふ様に成つたのや、北海道のアイヌが漸々に日本語を使ふ様に成つて來るの採を思ひ合はせて見ると、言語調べのみを根據としての推論は餘り頼みに成らぬとの事が悟れるで有りませう。言語と云ふものは人が生まれてから後に習つて覺えるので、持つて生まれるものでは有りません。夫れ故に血筋の如何に係はらず教へる者學ぶ者の意次第で、何語でも使ふことを得ます。異つた種族の言語の比較は是れ等言語の關係を示すには違ひ有りませんが、之れを以て直ちに種族の關係を示すやうに考へるのは大早計と云はなければ成りませ

ん。
系圖調べの最も確實な根據は身體上の諸性質に在る事勿論で有りますが、二

三代間の事を推究するのと、何十代何百代と云ふ間の事を推究するのとは、比較の爲に選ぶべき部分若くは性質に相違が有るとの事を記憶して居らなければ成りません。親と子との間には身體上の諸性質に似通つた點が多く有りますが、二代を隔て三代を隔て、比較すれば斯かる點は少かる可く、更に遠く代を隔て、比較すれば一層少かる可き筈で有ります。短い間の血筋調べは割り合ひに容易でありますが、長い間のことを考へるのは甚だ困難で有ります。

之を考へるには先づ何が最も變り方が少いか、如何なる性質が最も動かずに居るか、夫れを髓めて掛からなければ成りません。親と子とか、親と子と孫とか云ふ様に同時に生存する者に就いて身體上の諸性質を通觀する事は爲し得べき事で有りますが、夫れよりも遠く離れて居る先祖と後裔との比較の如きは到底正確に行ふ事は出来ないと云つて宜しい。然らば何が最も變り方が

少いか、如何なる性質が最も動かずに居るか、との問ひに對しては二三代間の事實を以てするの他に答へを爲る事を得ないかと申しますに、決して左様では有りません。一體多數の人類が集まつて一部落とか一民族とか云ふ團體を形作つて居るのは、主として、血筋が繋がつて居るのに原因するので有りますから、團體中の大部分に通ずる或る身體上の性質は、共同の先祖からの遺傳、及び同一の周圍の状態の影響と考へられます。して見ると團體の共通性や或は之に近いものから、同一状態の影響と覺しき一致を引き去れば、其團體大部分の先祖の身體上の性質が推測される譯で有りました。此身體上の性質が取りも直さず、古來最も變動の少かつたもので有るのです。夫れは何々で有るかと云へば、先づ髪の毛の性質、假令ば眞直だとか、縮れて居るとか云ふ様な事、夫れから皮膚の色、鼻の形等、是等が部落なり種族なりの系圖調べの根據と成るべきもので有つて、若しも二つの團體を比べた時に、是等

諸點の多くが一致して居るか、又は好く類似して居るのを認めたらば、此二つの團體は系圖的緣故が近いと考へて然るべき事で有ります。丈の高さで有るとか、頭の丸さで有るとか云ふものを、別々に抜き出して比較したならば、隨分緣の遠い者の中にも偶然の暗合が発見されるで有りませう。併し、様々の側から見ても等しく類似或は一致が有らば夫れは血筋の近いのに因ると云ふより他に解釋の下し様がありません。

諸種族の系圖調べに於て、最も古くからの緣故、即ち史傳も絶え、風習も言語も異つて居たと云ふ頃からの緣故を示すものは身體上の性質、之れに次いででは言語、夫れから風習、次は史傳で有ります。故に比較的新しい時代に於ての緣故は身體、言語、風習、史傳に由つて探る事が出来、稍古い時代の事は身體、言語、風習に由つて究める事が出来、更に古い時代の事は身體と言語に由り、最も古い時代の事は身體の調べに由つて推測するを得るのです。

場合に由つては地理上の關係も亦大に參考と成ります。

以上はホンの概略の方針を示したに過ぎませんが、常識分類、人爲分類、類聚分類を離れた人類自然分類の作り方の大意は述べ終つたと信ずるので有ります。

諸人種に於ける衣食住の比較的價值

衣食住の三つは通常人生缺く可からざるものと考へられて居りますが、これは開明社會に就てのみ云ふべき事で、決して人類たるものは其生存上必ず此三つを要すると云ふ譯はありません。衣食住と云ふと衣と食と住とが同等の價值を有する様に聞えますが、實は其比較的價值は人種に依つて違つて居るのであります、私は本篇に於て此事を述べて見やうと思ひます。

凡そ人類が生きて居る以上は諸器關の働に連れて、諸組織に廢れ物が出来

ので、其費えを補ふものが入用になる、此補ひ即ち滋養物は、主として、又通常の場合に於て、口から入る所の飲食物であつて、之を約言して食と申します。最下等の動物には定まつた口のない事もあります、體外の物を體内に取り込んで、補ひとなるべき性質のものに變化されると云ふ點に於ては、口を具へて居るものと差異は有りません。食は動物全體に通じて生活上必要のもので有ります。

人類は食物の原料を獲んが爲め動き廻る、食物を調理せんが爲に動き廻る。或は自ら原料を獲、自ら之を調理せずとも、他をして己の爲に斯る働きをなさしめんが爲に動き廻る。人類はよく動き廻る者ではあるが、固より動き廻るではない。疲勞の爲に休息する事も有る、働きを爲し終つた爲に、一時一箇所に留つて居る事も有る。天氣の悪い爲に、閉ぢ込められる事も有る、眠を催した爲に横臥することも有る。運動の時と静止の時との有るのは動物の

常ではあるが、種類に依つては其静止の場所、特に其睡眠の場所の定まつて居ることが有る。他動物の場合では巢或は埒と云ふ所であるが、人類の場合では、斯かる場所をば住居と云ひ、又短く單に住とも云ふ、住は一定の居所である、其自然の岩窟たると人爲の横穴たるとは問ふ所が無い。其自然の立ち木の間なると、人造の建築たるとは問ふ所でない。天然の供給を仰いでも、人爲で飼養耕作しても、或は生の儘でも調理して、直接に口腹の欲を充たし、間接に身體の養ひと成る物をば、總て食と云ふならば、自然にある場所其儘でも、多少人工を加へた所でも、多少附屬物を添へた所でも、一定の時の間、座臥休息、特に睡眠の場所として選らんだ所は總て住と云ふを得るであらう。住とは斯かるものであるとすれば、之を人類から奪ふことは出来ない。人類が身體を有する以上は、又人類が座臥休息睡眠する以上は、住のないと云ふ事は有り得べからざる事である。砂漠にテントを張つて生活して居る者の爲

には、テントを張つた其場所が住である。テントを取り去つても、其場所の住たる事は失はない。船中に生活して居る者の爲には船が住である。纜を解いて動き出しても船の住たることは失はない。住は人生の必然で有る。食を断てば人は死ぬ。死んでも構はぬとならば人から食を奪ふ事は出来る。食は人生に必要ではあるが、人の存在と共に必ず存在すると云ふものでは無い。住は人の存在と共に存在する。奪はうとしても奪へるものではない。食と住との人に對する關係は、決して同一様ではない。食は必要で有る。住は必然で有る。

衣は如何で有るか。衣とは狭い意味にとると、我々の着て居る和服、若しくは洋服の様に、身體の大部分を覆ふものであるが、廣い意味では我が身體以外の物を取つて、多少身體の部分を覆ひさへすれば、夫れが衣で有る。鳥の身體を覆ふ羽根は、身體の自然の附屬物で有るから、衣とは云へないが、叢

蟲の所謂叢は外界の物から出來て居るから、衣に近いものである。眞に衣と云ふべきもの、即ち多少身體の部分を覆ふ爲、故意に作つたもの、或は選んだものに至つては、人類以外の動物には皆無で有る。食は人類以外の動物に於ても必要、住は人類以外の動物の或る種類に於て必然。衣は人類以外の動物に於ては絶無。自然界に於ける衣の價値の少い事は明かな事實であります。廣く人類を見渡すのに、我々の様な身體の大部分を覆ひ隠して居る者も有りますが、小部分しか覆ひ隠して居ない者もあり、全く覆ひ物を持たない者も有る。衣は人類中の或る者に取つては殆ど必要になつて居るが、人類全體に通じて考へて見れば、其成り立ちは一種の贅澤品と申して宜敷い。

人類の食は小兒が天性として吸ふ處の乳に始り、經驗上饑渴と云ふ不快の感を去り、美味を味ひ、腹に力付ける爲、或る物質を口に入れると云ふ事も起り、原因結果を考へたに及んでは、身體保全の目的を以て、滋養品を食ふと

云ふ事も生ずる。小兒の食を採るのは天性である。幼年者の食を採るのは、飲食すると云ふ事を其儘に快樂とするのと、大人の所爲を見習ふの由に由る。大人の食を採るのは習慣にも由り、飲食即ち快樂を感じるにも由るが、又他の快樂を得る手段として、身體を保全しやうと云ふ考へにも基くので有る。食の第一の用は、勿論生命を繼續しやうと云ふのに在るが、第二の用は快樂を感じやうと云ふのに在る。

人類の住は必然のものであるが、或は風の吹く時、之を防ぐ装置をするとか、或は雨の降る時、之を凌ぐ覆ひを作るとか、或は日の照り輝く時、之を遮ぎる日除けをするとか、又は人工を以て斯かる事を爲すとも、同じ目的を達する爲に、洞穴樹間に隠れるとか云ふ事をする時には、住は身體を保護するものとなる。住は人類の居所たると同時に食物の貯へ場、器具の置き場たる事を得、幼少の者は親に従つて住居し、長じたる者は男女結婚して共棲する。

住の第一の用は、身體を保護するに在る。第二の用は所有品を纏めて置くに在る。第三の用は近親を結合するに在る。

衣は決して人類普通ではない。諸人種の事を調べて見れば、全くの裸體のものもあるし、簡單なる裝飾品のみを身に帯びて居る者もあるし、腰の邊を隠して居るものもあるし、半ば裝飾半ば保護の意を以て身體の小部分を覆つて居る者もあるし、主として保護の意を以て身體の大部分を覆つて居る者もある。衣服が整つた後に裝飾が起つたと思ふのは間違で、事實は裝飾の面積が段々廣く成つて、終に衣服と云ふ物が出来たと云ふ事を示して居る。子供は親の躰に從ひ、大人は古來の習慣に從ふ。一旦衣服を着ると云ふ風が起つた上は、夫れが殆ど身體の一部分の様になつて、之を脱ぐと何と無く物足りぬ様に見え、或は急に外氣に觸れる爲に健康を害する様な事も起る。開明社會に於ては衣は主として身體を保護するものと成つて居るが、其進歩の跡を

尋ねると、身體保護の爲に衣が生じたのでなく、却て衣が行はれる爲に身體が之に慣れ其結果衣が無れば成らぬ様に成つた者と考られる。發達した場合に於ては、衣の第一の用は護身、第二の用は禮義、第三の用は裝飾である。主なる用のみに付いて言つて見ると、食は人體内部の養ひと成るもの、衣と住とは人體外部の保護と成るもの。衣と住との違ひは唯、身體に密着して居て、立ち居共に伴はれると、身體を離れて居て、出入の自由で有るのみに在る。衣は一人々々の有する動かすべき小さな住と見て宜しく、住は數人共有の動かすべからざる大きな衣と見て宜しい。衣食住と三つには云ふが、用によつて區別を立てれば、養ひと保護との二つで有る。養ひの事は何所の人民に於ても、同様に必用で有るが、保護の事は人種によつて差異が有る。我々日本人でもヨーロッパ、アメリカの開明人でも、衣及び住によつて、保護を得やうと云ふ念は、食によつて養ひを得やうと云ふ念と

殆ど同じ位であるが、印度人中の下等の者、アビシニヤ人ボル子ヲ人等に於ては、身體保護の爲としての衣を得やうとの念は甚だ少ない。アフリカのブツシマンの如きは、衣に對する念も住に對する念も甚だ少い。オーストラリアのク井ンスタンド土人、南アメリカのテラデルフユーゴ土人等は、住に對する念も少いが、衣に對する念は皆無である。衣食住の三つが揃つて人生缺く可からざるもので有ることは決して正しい考へ方では無い、眞に缺く可からざるものは食計りで有る。或る人種に於ては、食の價值が第一で、其次はズツト降つて住、衣は全く無用。或る人種に於ては食の價值が第一で、次はズツト降つて住、夫より降つて衣。或る人種に於ては食の價值が第一で、次が住、ズツト降つて衣、或る人種に於ては食の價值が第一で、次に位する住も衣も之と大した差が無い。衣食住の三つが人生缺くべからざる物と考へられる様に成つたのは、生活態發達の結果で有る。衣食住缺く可からずとは、開

明社會に於てのみ云ふべき事である。衣食住は人生缺く可からずとの言を以て、廣く人類全體に關するものは、斷じて誤りと云はなければ成りません。

野蠻未開人種の智慧

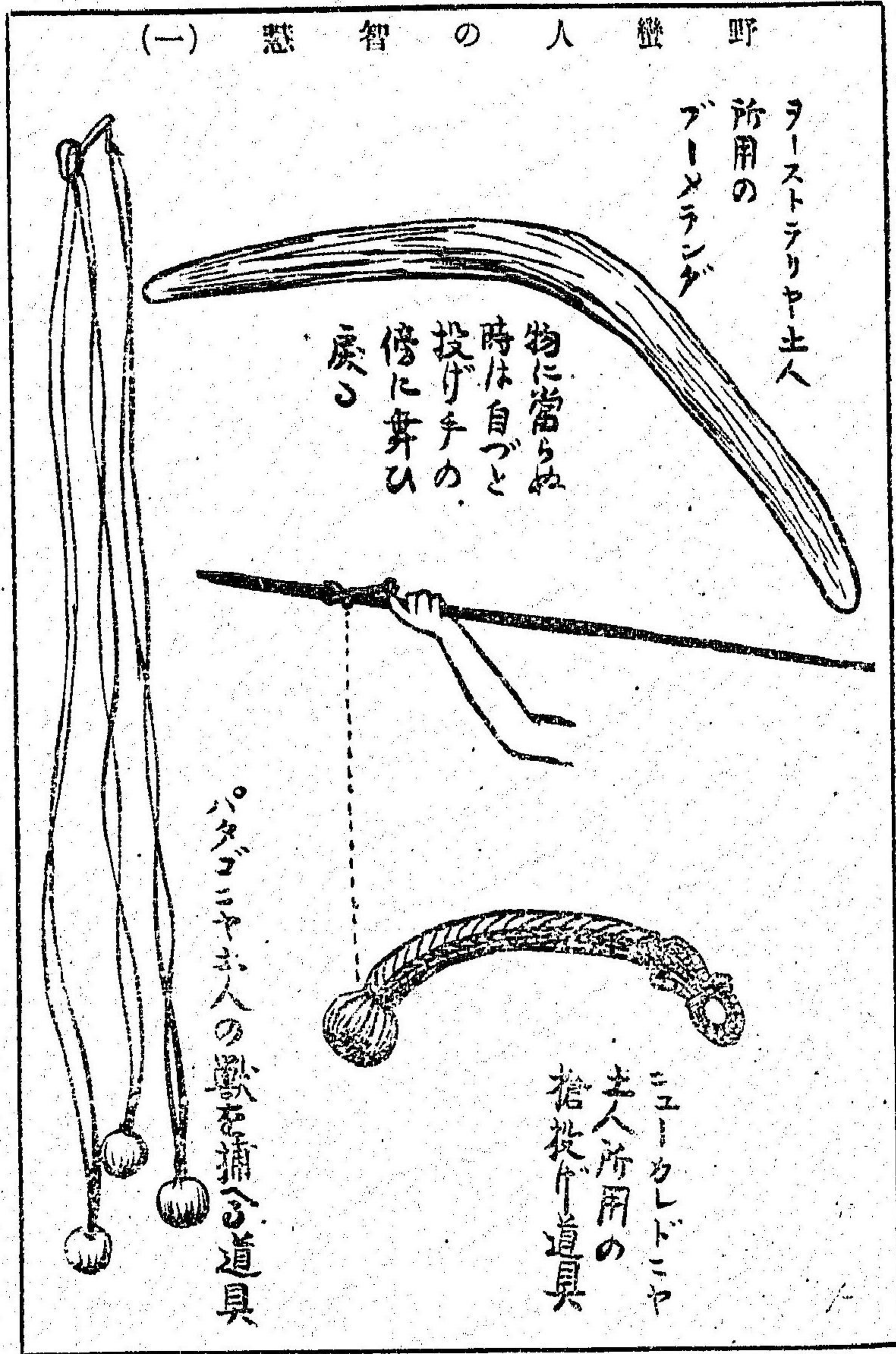
開化した人種の智慧は珍しく無い、湯氣の力を用ゐて車や舟を動かす、金屬の彈力を利用して時計を作るの類は、其工夫の上から云へば、感服すべきものたるに相違無いが、發明者の棲息して居る社會の有様が、全體に進歩して居て、發明者自身の見聞も廣く、思考力も強いのであるから、寧ろ其位のもの、出来るのは當り前の話で、別段に面白味を感じない。今日の所では未だ完全な風船と云ふものは出来て居ないが、若しも或人が一種の羽衣の様なものを作り出して、之を着さへすれば、空中の上下進退とも自由であると云ふ様な事に成つたら如何と申しますに、それは大發明に違ひ無い、世間に利益

も與へやうし、間接に種々の事に影響を及ぼしも致しませうが、併しそれが開化國人の手に成つたのなら、敢て驚くには及ばない。何故斯様な物が今迄出来ずに居たらうかと、其方を反つて不思議に思ふ事である。此所に記さうと云ふのは、智慧の無さうに思はれる野蠻人や、智慧の乏しさに思はれる未開人の舉動中にも、彼等の智慧を表はし示す所のものが有ると云ふ事でありませう。

小屋を建て、風雨を凌ぎ、船を作つて水を渡るの類も、幾分かの智慧を要するには相違ありませんが、是等は人類普通と申しても宜い事で、別段に算へるに及ばない、私は或る限られた地のみ行はれる事丈に就て述べる積りであります。

世界中で一番開けて居ないのは、オーストラリアの土人でありませうが、先づ此土人の事から申しませう。

(一) 野蠻人の智慧



著者 畫

彼等の中には衣服と云ふべきものを有する者は殆ど皆無、住居は僅かに木の皮を立て掛け、又は木の枝を寄せ集めた位なもので、部落の首たる酋長杯と云ふ者も無い。斯様な有様の人間で有りますが、或る事柄に關しては、妙に智慧を現はして居ります。食物を獲る爲には種々な工夫を致しますが、先づ最も面白いものゝ事を述べませう。

彼等は蜂蜜を好みますが、其巢を探す爲には、蜂の舞つて居るのを見付け、其飛んで行く後を追ひ掛け、何所迄も随つて遂に目的を達することも有りませんが、蜂が餘り高い所に舞ひ上ると、形を見失ふ様な事が起る。それで何か目印を着けると云ふ必要が生ずる。併し蜂を捕へて目印を着けると云ふのは中々困難なことである。土人は先づ蜂の屢は探ねて来る様な花の傍に居て、口に一杯水を含んで、蜂の来るのを待つて居る。蜂は何とも知らずに花の蜜を探りに来る。そこで土人は蜂を目掛けて水を吹き掛けると、翅が濡れて自

由に動かない様になる。土人は得たりと蜂を抑へ、兼ねて用意のゴムを其脊に塗り、此所に軽くして見易き物を貼り付け、暫く待つて居ると、翅の濕りが乾くに從つて動き出し、舞ひ上がり、巢に向つて飛び去る。目印を付けた爲に見え易くも成り、重み加はつた爲に飛び方も遅く成るので、土人は比較的容易に蜂の後を付けて行くことが出来る。中々考へたものです。又土龍の様に、地面の下に潜り込んで、此所彼所と動き廻る小獸を捕へるには、通例其穴を見付けて、之を掘り擴げるのであるが、掘つても掘つても先へ先へと逃げて行かれる、と土人は斯う云ふ事をする。先づ細くて好くしなふ棒を探り、之を穴の口から入れられる丈深く奥の方に差し込み、行き止まりに達したと思ふと引き抜いて穴の口から地上で其方向に其長さの棒を以て行き止まりの位置を測り、其點から稍々先の方の地を掘り下だす。斯くすれば小獸が地下でセツセと穴を掘つて居ても、地上からして凡そ此邊に潜つて

居るとの事が推知出来るから、無駄骨折らずに捕へることが出来る。海龜を取るにも面白い事をする。槍は刺さり悪し、繩も掛かり悪い。何か甲に吸ひ付く力を有する物でも有れば都合が宜い、オーストラリヤには丁度お逃へと云ふ様な魚が居る。之れは小判頂きと云ふ魚の類で、頭の上に小判形のギサクした物が付いて居る。これが章魚の疣と同じ様に、好物に吸ひ付く力を有して居る。土人は此奇妙な魚を捕へて飼つて置いて、海龜を取る道具にする。先づ飼つて有る場所から此魚を取り出し、此體を繩で括くり、恰も鳥に向つて鷹を放つ様な風に海魚に向つて海水中に放つて遣ると、此魚はズツと泳いで行つて、海龜の腹部に確と吸ひ着く。頃を見計らつて土人は繩を引く。海龜は魚に吸ひ着かれた儘で引き寄せられる。オーストラリヤ土人は、又鳥を取る爲に一種の妙な道具を用ゐます。其全體はへの字形の薄い木片で長さは大略二尺計り。一端を把つて、刀を振る様な

風に動かす、鳥を目掛けて投げると、此道具はキリ／＼／＼と廻轉し乍ら飛んで行く。それで鳥に当たれば、鳥は傷き道具の運動は止み、共に地に落ちる。覗ひが外れて鳥に当たらないとどうなるか、更に遠くの方へ飛んで行つて仕舞ふかと云ふに、さうで無い。若し何も当たらないと其場所から方向を轉じ、後戻りして投げ手の許に返つて来る。私は便宜上之を飛去來器と名付けましたが、實に妙では有りませんか。鳥に當れば鳥と共に落ち、當らなければ本に戻る。少し説明をしなければ聞く人が本統と思はぬ位に都合の好い道具であります。先づへの字形の木片(寧ろ板)に廻轉力を與へ乍ら、之を斜めに投げ上げると、板は廻轉の結果圓板を形作りつゝ、斜面に添つて上つて行く。此時何物かに当たれば圓板はへの字形の板に戻り、進行の力は全く失せて、單に重みの爲に地に落ちる。然るに若し何物にも當らない時には、圓板は或る點迄行くと進行の力を失ひ、墜落しやうとする。併し空中に於て

斜めの位置で放たれた圓板は、空氣の抵抗の爲に、眞直には落ちられない。抵抗の最も少いのは何れかと云へば、圓板の縁の部で下端に當る所で有る。即ち上つて来た所の斜面が下るに於ても最も抵抗の少い所で、此方向を取つて落ちて来れば、への字形の板は自然投げ出された本源の場所に戻つて来る譯であります。オーストラリア土人が、こんな六かしい事を考へる筈はありません、是は只私が説明を試みた丈の話して有りますが、兎に角土人は經驗上種々の工夫を凝らして斯かる重寶な道具を拵へ出したのであります。オーストラリアの北に當つて、ニューギニーと云ふ大きな島が有る。此所に住んで居るのは、バブアンと呼ばれる土人ですが、オーストラリア土人よりは稍々進んで居ます。婦人は何れも腰蓑を着けて居ますし、男子は頭髮を様々に飾つて居ります。衣服と云ふ様なものは何も有りませんが、家屋は中々好く整つて居ります。此土人は平地の上に家を造る事も仕ませんが、又海中に

杭を澤山立て、其上へ家を作ることも致し、大木の枝の間に小家を拵へることも致します。海中に家を作るのは敵の襲來を防ぎ、海岸に多い蟲類の飛んで來るのを避け、又漁業の便を得る益が有りますし、樹木の上の小家は他人の近づくを妨げ、且つ遠方を見渡す益があります、即ち此土人は水上住居、地上住居、樹上住居と云ふ三種の家屋を作つて居るのであります。此土人の武器には、頸懸け鎗と云ふ面白い物が有る。鎗は木で拵へた物で、穂先は堅い木が尖らして有る丈で有りますが、鋭く出來て居ますから、随分好く人を突く事が出來ます。只是丈では竹鎗と餘り違つた所は有りませんが、此上に妙な仕懸けが加へて有るのです。夫れは何でも無い、早く云へば魚を捕るタマの輪の様な物ですが、是を鎗に括り付けると恐るべき武器が出來るのです。

全體の形を云ふと十字の横棒が兩方に延びて上の方へ反り返り、中央で結

び付いて輪を形作つた様な物です。十字の上端が穂先で其尖端は丁度輪の中心に当たり、十字の下端が延びて柄に成つて居るのです。普通の鎗の様に用ゐるのには、輪が邪魔に成りますが、土人は次に申す様な風にして之を使ふのです。敵と争つて敵が逃げ出すと、此武器を持つて追ひ掛ける。さうして棒の先の輪を逃げて行く敵の頭へ嵌める。これでウンと引くと輪の前の部が喉に強く當たるので敵は躑けて後の方へ倒れ掛かる。其時鎗を前の方へ突き出すと穂先が頭にツブリと刺さる。随分恐ろしい武器です。ニューギニーの東南、オーストラリアの東に、ニューカレドニアと云ふ島が有る。此所の土人も開化の度に於てはニューギニー土人と大差無しと申して宜しいが、彼等の使ふ鎗投げ紐は餘程氣の利いた物です。一體鎗を投げるには穂先を下にして右の手で柄の中程を握り、其儘手を上げて鎗を頭の邊で水平にし、穂先を前方に向け、目的物を見掛けて眞直に投げ

るのが利き目が強いのですが、若し中央に紐が縛り付けて有つて、其紐を手に確と握り乍ら、指先で鎗を前の通りに扱ひ、柄を持つて鎗に前進の力を與へるのみならず、指先を柄から離れた後も尙紐を前の方に急に引いて、其後に紐をば手から全く離すと云ふ様にすれば、尙更勢好く鎗が飛んで行く。ヨロツパでは昔斯様に紐を付けた鎗の用ゐられたことが有つた。併し之では鎗を投げると同時に附屬の紐が飛んで行つて仕舞ふ譯ですが、ニウカレドニヤ土人は甘い事を遣ります。鎗投げ紐は長さ一尺計りで、一端には指先を嵌めるに足る丈の輪が付いて居り、他端には大きな結び玉が付いて居るのです。先づは羽織の紐の房の所を玉に仕たのだと思へば間違ひ有りません。そこで鎗を投げ様とする時には、輪を右の手の人差し指の先に嵌め、紐の他端を穂先と反対の方に引張つて鎗の柄に一卷き巻き付け、玉を柄と紐との間に潜らせ、紐を穂先の方に引いても辻らない様にするのです。鎗の位置は前に申し

た通り、只確り握る代りに人差し指で紐を引張り乍ら指先計りで柄を持つと云ふ點が違ふのです。これで鎗を上の方に上げ、穂先を前にして頭の邊に横たへ、力を入れて前に投げると、彼の紐は丁度柄の中央に結び付けて有ると同様の用を爲して飛ぶ力に勢を副へる。そこで紐が柄に付いて居るのだと、柄に付いた儘で飛んで行くのですが、只巻き付けて有る丈なので、鎗が前に進むに従つて、柄と紐との間に挟んで有る玉が抜け出し、紐と柄との縁が離れ、鎗許りに飛んで行つて、紐は輪の部分が人差し指に嵌つた儘で此方の手に残る。斯くして一つの紐をば幾つもの鎗を投げる役に立てるのです。南洋諸島では方々で丸木舟が盛んに行はれて居ますが、浪風の荒い時や、物を多く積んだ時には轉覆する恐れが有る、夫れで其豫防として丸木舟の體へ直角に且つ水平に何本かの棒を括り付け、各の棒の一端を同じ方に長く延ばし、其延びた端に舟の體と並行した太い棒を括り付ける。云ひ換へて見れば、

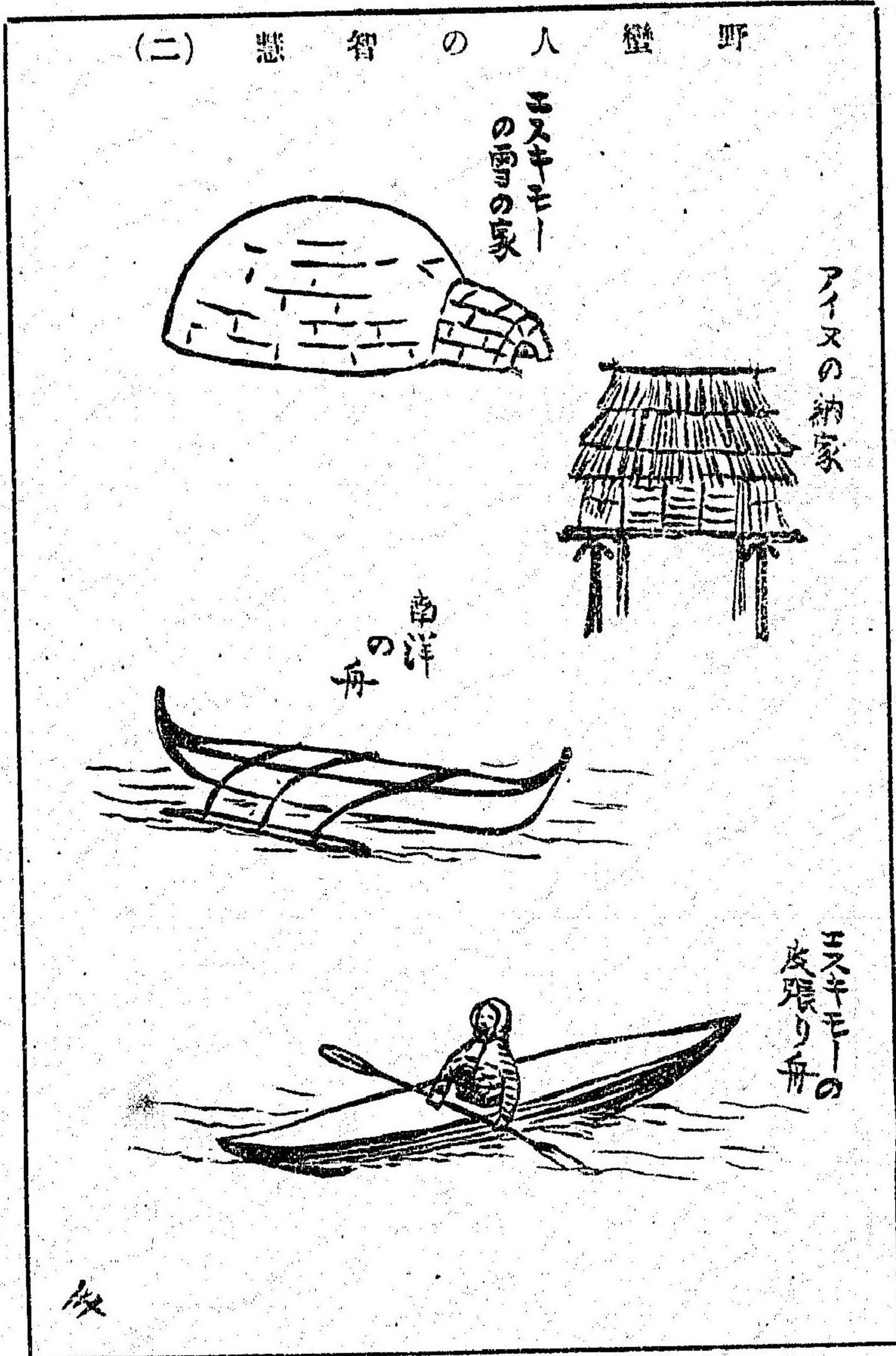
舟と太い棒とを離して並べて置いて此二つの物を幾本かの横棒で繋ぎ合はせるのです。此太い棒は浮きの用を爲し、舟と同じ方向に進むのですから、どんな事が有つても舟は覆らない。帆を掛けて十分に走る事が出来る。最も水は随分はね込みますが濡れるのを心配する様な衣服を持つて居ない土人達はその様な事には更に頓着致しません。

此舟に乗つて西の方に走つたと想像して、是より讀者諸君をアフリカに導きませう。

アフリカの東海岸には、カファアと呼ばれる土人が居ります。子グロ程では有りませんが、皮膚の色は黒い。特別に體に適する様に仕立てた衣服は無いが、獸皮を以て身を纏ふ事は知つて居る。粗末では有るが小屋も有る。又金屬の道具も作る。南洋土人から見ると進んで居る點も有るが、勿論開化の度の高い者でも無い。

此地方には獸類が多く、又其肉や皮は土人の生活に對して極めて肝要であるので、様々な方法を以て獸類を捕獲する事が行はれる。其一つは大きな落とし穴を四角に掘つて有つて、穴の底には鋭く尖らせた棒が何本も立て、有る穴の上には四方の縁に沿ふて多くの木の幹が横たへて有つて、全體が恰も中央に四角な穴を開けた蓋の様に成つて居る。此落とし穴の兩脇には堅固な垣が作つて有つて、夫れが丁度獸類を穴に導き込む様に出來て居る。垣の位地を尙ほ精しく云つて見ると、其平面圖は八字形を爲して居て、狭まつた先が四角形の落とし穴の一邊に接して居るのです。左右の垣の長さは各十丁に餘る事も有るとの事です。一體に作り方の大きいのは推測出來ませう。獸を此穴に落さうと云ふには數百の土人が鎗と楯とを持つて遠巻きに獸を追ひ寄せ、段々に垣の狭まるに従ひ獸は他に逃げ途を失ひ、據無く穴の縁の所に來、其危険を知つて後戻りを仕様としても、後から後から押して來る他の獸の爲

(二) 野蠻人之智慧



著者 畫

に終に深い穴に落され、彼の尖つた棒の爲に傷けられる。上へ上へと折り重なつて落ちる獸は棒で傷けられる事は無いが、相互に傷け合ひ、終には悉く土人に捕へられて仕舞ふ。

ジラフの落とし穴は又構造が別です。是は一丈餘の穴二つから出來たもので、中間の仕切は高が七尺計りです。ジラフが此穴に落ちると前脚が前の深い穴に落ち、後脚は後の深い穴に落ち、中央の境で腹を支へられ、身體を空に釣られる。此儘で捨て、置くとジラフはもがき疲れて終に弱つて仕舞ふ。此時に成つて土人は利器を以て此獸を殺すのです。

カフアアは又妙な事を仕て噴き煙草入れを作ります。其原料は何かと云ふと牛の血ですから不思議ではありませんか。最初土をつくねて瓢の形なり、動物の形なり、好きな物を拵へ、全體を幾度も牛の血で塗るのです。血は凝固すると膠の様になる、繰り返し繰り返し、斯う云う事をする、厚い層を以

て土細工の物を包んだ様に成る。土人は此層の一部に孔を穿ち、尖つた棒を以て内の土をつゝくのです。さうすると土は粉に成つて孔から出る。つゝき壊しては出し、つゝき壊しては出しすると、仕舞には内の土は皆出て、牛の血の凝固で出来た外層計りとなる。出来上つた物は丁度ゴム細工か何ぞの様に見えます。孔は直ちに此器の口にするのです。野蠻人の考としては中々旨いものではありませんか。

アフリカの南部には、ブッシマンと云ふ種族が居ます。體は小さいが智慧は中々有る。此土人の駝鳥を捕るのが餘程面白い。駝鳥の肉は食料になり、羽根は裝飾品になる。土人は駝鳥を多く捕うとするが、此鳥は目が鋭いので少しでも怪しい物が見えると直に用心をするから尋常の手段では容易に目的を達することが出来ない。そこで斯う云ふ工夫をする。先づ兼ねて取つて置いた駝鳥の皮を旨く自分の頭から脊にかけて被れる様に拵へ、頭の所へは長い

棒を通して、高く立て、之を上手に動かして乍ら歩くと、一寸は偽物と見えな
い、一體アフリカは黒人の居る地方で、此ブッシマンも色が黒いから、脚を
自然の儘にして置いては、此點で見顯される恐れが有る。土人も駝鳥の脚の
方が自分のよりも白いと云ふ事を認めて居るから、脚に白い物を塗り付ける。
是れ丈注意すると、目の鋭い、用心深い駝鳥でもうつかりして騙される。土
人は羽根の付いた儘の駝鳥の皮をスツポリ被り、棒を動かして動かし、眞の駝
鳥が餌でも拾ふ様な風をして、ノソリノソリと歩き廻はつて段々と駝鳥の群に
近付き、何れか一疋を指して其傍に寄り添ひ、隠し携へた弓矢を竊かに取
り出し、覗みを定めて矢を放つ。不意を打たれた駝鳥は避ける間も無く其場
に倒れる。射方が巧で、傷けられた駝鳥が暴れ廻りさへ仕なければ、射手は
又何事も無かつた様な風をして、ノソリノソリと他の駝鳥に寄り添ふのです。
アフリカ土人の事は此位にして、次にアメリカ土人の事を記しませう。

南アメリカの南部にパタゴニヤと云ふ所が有る。此所の土人は前のブツシマンとは反對で丈の高いので有名です。大男總身に智慧が廻り兼ね杯とは云ひますが、パタゴニヤ土人中にも相應に智慧者が居て「ソマイ」だの「アチコ」だのと云ふ妙な道具を作り出しました。是は獸を捕るに使ふ物で其構造は極簡單です「ソマイ」と云ふのは重りを付けた紐二本で出来「アチコ」と云ふのは同様のもの三本で出来て居ます。重りは雞卵位の丸石を獸の革で包んだもの、紐は長さ三尺ばかりで、重りの付いて居ない方の端を結び合はせ、此結び目の所を持つ所として有るのです「ソマイ」も「アチコ」も、主として馬上で使ふので、其使ひ方は次の通りです。先づ馬に乗つて左の手で手綱を取り、右の手に「ソマイ」なり「アチコ」なりを下げて獸を追ひ廻すのです。イザ此獸を捕へやうと決心した時には、右の手を上げて紐をグル／＼廻はす。各の紐の端には重りが付いて居るから勢好く風車の様に廻る。十分に覗ひを付けて置い

て、廻はし乍らに紐を放すと、結び目が中心に成つて「ソマイ」なら一直線、「アチコ」なら三方に延びて其儘グル／＼廻はりつゝ、目指す獸に當たると、獸の他の部分は重りの飛ぶ勢に連れて獸の頭なり足なりに巻き付く。獸は運動が自在でないから倒れる、追つて行つた土人は馬から下りて其獸を捕へる。見た所は重りと紐丈で何の仕掛けも無い甚だ簡單なものです。使ひ方一つで極めて利き目の強いものとなるのです。

アメリカの中央部に當たる西印度のキユバ島の土人中には曾て魚を用ゐて魚や海龜を捕へる事が行はれて居たと申す事です。現今は其法が用ゐられて居るかどうか慥で有りませんが、魚の選み方、魚の使ひ方は前にオーストラリヤ土人の部で述べたのと大差は無いのです。即ち小判鮫の様に頭の上に物に吸ひ着く力を有する構造を具へて居る魚をば捕へて、之を長い紐の端に縛り付けて飼つて置き、捕獲しやうと云ふ動物の見えた時紐を緩めてやると、速

かに泳いで行つて目的物に吸ひ着く。土人は其頃を見計らつて紐を手繰り上げる。吸ひ着かれた動物は、吸ひ着いた魚と共に水面に浮び上り、終に土人に捕へられる。例へて申さば磁力の有るもので鐵片を釣り上げる様なものです。

北亞米利加の原野には、バイソンと云ふ大きな牛の様な獸が澤山居ます。北亞米利加土人が此獸を捕へるには、ブッシマンが駝鳥を捕へるのと似寄つた趣向を行ふ事が有る。但しブッシマンは駝鳥をして鳥分を同類と誤認せしめる様に工夫するのですが、北亞米利加土人はバイソンをして自分を恐るゝに足らぬものと思はしめる様に工夫するのです。ブッシマンの被るのは駝鳥の皮ですが、亞米利加土人の被るのは狼の皮です。バイソンの群居する原野には狼も亦群居する。バイソンも狼を害せず、狼もバイソンを害せず、相互に好く馴れ合つて居ますから、狼の眞似したものが近付いて來てもバイソンは

一向平氣です。土人に取つてはバイソンの眞似よりも狼の眞似の方が無論仕易い。そこで土人は狼の皮を頭付きの儘で旨く被れる様に仕、之で自分の頭と體とを覆ひ、四つ這ひになつてソロ／＼と目指すバイソンに近寄り、隠して持つて居る弓に矢を番へて、心臟の部に射るのです。方法はブッシマンの駝鳥捕りに類して居ますが、此バイソン捕りの方が餘程危険です。雪の降り積んだ時分にバイソンを捕るのは右に申したよりは安全です。バイソンは體が大きくて重いものですから、大雪の時には歩くのが中々困難で、一步一步ザクリザクリと足が深く雪に這入るのです。斯う云う様な場合に土人は長さ五尺程の大きなかんじきを作り、之を穿いて雪を踏んで出掛ける。かんじきは舟の雛形とても云ひさうな形に出來て居て、常に足を積雪中に踏み込む事を防ぐのみならず、之を穿く者をして積雪の上を自由に迂り廻はる事を得せしめます。かんじきの中央部には足の指先丈出す事の出來る位な孔が設けて

有つて、穿く者が迂る方向を變へたり、運動を緩かにしたり、或は進行を止めたりする時、此所から指先を出して随意に調子を取る様に仕てある。バイソンは大きな體でザクリザクリ歩く、土人は身輕で迂り廻る。斯うなつては如何なる獸でも人には敵はない、忽ちに鎗を以て仕止められて仕舞ふ。チーストラリヤ土人が蜂蜜を探す事に就いては、前に記しましたが、北アメリカ土人には經驗上覺え込んだ幾何學的智識を應用して、比較的容易に其位置を確める者が有る一體蜂は傳書鳩と同様、他所に出て居て住所に歸る時分には方角を考へて眞直に飛んで行くものたさうですが、北アメリカ土人は此事を好く知つて居て、或る一疋の蜂が花の有る所を去つて或る方角に向つて眞直に飛んで行くのを見ると、彼のオーストラリヤ土人の様に無益に走る事は爲す、木なり石なり何か目當てを付け、何れの方角を指して眞直に行つたかと云ふ事を好く心に留め、少しく離れた所に行き又花を去つて飛んで行

く蜂を見付け、同じ様にして飛んで行く方向を確め、前に目當てを付けて置いた道筋と、今度確めた所の道筋とは何れの邊で行き合ふか、即ち二つの線の交叉する點は何所であるかと云ふことを考へ、凡そ此邊と思はれる所へ行つて初めて巢の所在を尋ねるのです。これは二疋の蜂を同一の巢に向つて歸るものと假定しての尋ね方ですから、或る場合に於ては一疋の蜂の巢と他の一疋の蜂の巢とは別物であつて、此尋ね方が役に立たない様な事も有るでせう。併し兎も角も理屈を考へて徒勞を避ける事を工夫するのは感心ではありませんか。

アメリカの北の端づれには、エスキモーと云ふ種屬が居ます。これは中々智慧のあるもので、詳しく述べれば色々な話が有りますが、先づ一例として雪車の事を申しませう。エスキモーの居る邊は寒い所で迎も木材にする様な樹木は生へない。夫故に犬に曳かせる雪車を作らうと仕ても其原料が得難い。

通常は他所から漂つて来た流木や大きな海獣の骨杯を継ぎ合はせて作るのですが、夫れも得られないと云ふ場合には馴鹿の皮を細長く裁つて丸紵帯の様に縫ひ合せ、一端を括つて此袋の様なもの、中へ苔と雪とを交せて詰め込み、其隙に水を注ぎ込み、他端の口を括つて、寒氣の強い所へ出して置く。彼様な物が何になるかと云ふと、寒氣の爲に袋の中のものが堅く凍結して棒の様になる。詰り氷柱を馴鹿の皮でくんだと同様になるのです。此棒を集めれば立派に雪車を作る事が出来る。斯くの如くにしてエスキモーは氷を以て木材や獸骨の代用品を作るのです。

野蠻未開の人民でも、夫れく種々の點に於て智慧を廻らし工夫を凝らして居る事前述の通りで有ります。智識競争場裡に立つ所の開明人たるものは、愈々益々智慧を磨く事を心掛くるが當然で有らうと思ひます。

事物變遷の研究に對する人類學的方法

事物とは元來其意味の甚だ廣い言葉でござりますが、今私が人類學的方法を説かうとするのは決して廣い意味に取た事物全體に關しては有りません。此所に事物と云ふのは人爲の事物、即ち諸種の人事と人造の諸物とのみに限るのであります。

是等の事物は各之を圍繞する所の諸般の状況に適應して始めて存在するものでありますから、其變化の有無は状況に變化が有るか無いかと云ふ事に由つて判斷することが出来ます。抑も事物を圍繞する諸般の状況なるものは誠に複雑なもので、其權衡が些少の動搖もなく恒に同一様で有らうとは到底期すべき事では有りません。状況が變ずるならば是に適應して存在する所の事物の種類にも相違を生ずべき筈であります。時に隨つて事物に變化有るは免る

べからざる所と申して宜しい。如何なる事物は時に随つて如何に變化するか。何種の事物は何様の順序を以て變化するか。斯かる講究を稱して事物變遷の研究と申すのであります。凡て事物の變遷を研究するに二つの法があります。第一は或る事物を採つて其性質を調査し、斯かる性質の幾分かは如何なる事物が有するを得るかとの事を理論上より考へ、斯くて考へ得たる事物に就て再び先進者を推究し、漸次溯つて本源を探ねる法であります。假に之を推理的方法と呼びませう。第二は或る事物に關する古今の事實、殊に記録に由つて知るを得べき古今の事實を蒐集して年代の順に列擧し、多少直接に其事物の變遷を知る法、是は歴史的方法であります。第三は諸人種に就て過去現在に通じ或る事物の異同を考へ、如何なる時期より如何なる時期に移るべきか、如何なる時期の事物は轉じて如何なる時期の事物と成るべきかとの事を比較上より推究し、必しも年代の前後に拘らず、只管事物の變遷すべき途筋を考

へる法で、私が人類學的方法と申すのは即ち此事であります。譬へば衣服の變遷を研究するに當たつて、衣服は主として寒暑を防ぐもので有る、諸種の裝飾は奢侈から生じたもので元來は見掛けを構はぬ實用專一のもので有つたに相違ない、裁ちもせず、縫ひもせぬ布の類を身體に巻き付ける様な有様から、轉じて腰巻きと上着とを以て身體を覆ふ様な有様になり、漸次附屬物が増して來たのであらう、と云ふ風に考へるのが、衣服變遷の推理的研究であります。正しい考説の據とすべき材料の無い場合には已むを得ざる事乍ら、此研究法は我を以て他を推す弊があります。今人の心を以て古人の心を量るのは大人の心を以て小兒の心を量ると等しく誠に困難な事と云はなければなりません。

衣服の變遷を歴史的に調べれば、昔何と云ふ人が彼様な衣服を着た事がある、其後誰が彼様な物を作り出した、何某の歌に何々と云ふ句の有るのは其時代

に彼様な形の衣服の有った證據で有ると云ふ様な事が分かつて参ります。推
 理的方法は空想に流れ易いが、歴史的方法は事實の列擧を事とするもの故此
 憂ひは無い筈であります。歴史的材料が有るならば、無論推理的研究を唯一
 方法として便るには及びません。歴史的方法は推理的方法よりも遙に確實で
 あります。然しながら歴史的方法にも缺點が無いではありません。歴史の方
 法に據れば、何の次に何、何の次に何との順序は分かつて、斯る順序の存
 する所以は充分に知ることが出来ません。春は花が咲く、夏は葉が茂る、秋
 は實が熟す、冬は枝も幹も角々しく露れる、と云ふ事が分かつて、何の故
 に花を開くか實を結ぶか、何の故に葉が出るか落ちるか、と云ふ事が十分に
 知れなければ植物生理の道理を悟つたとは云へません。事物變遷の研究に於
 ても、方法に随つて彼様な別があるのであります。
 某地の住民は裸體で生活して居る、某地の住民は或る種類の裝飾品を身に着

ける、甲の人民は腰篋を用ゐる、乙の人民は類似の物を以て體の上部を覆ふ、
 或は雨降りの時のみ身に篋の類を纏ふ者有り、或は社會上の地位を示す爲に
 一種の服を身に着ける者有り、某住民の衣服は何より變じたる形跡有り、某
 住民の衣服には何物の遺風を存す、と云ふが如き實例を集め、社會進歩の順
 に従つて之を連續すれば、衣服變遷の人類學的研究が出来るのであります。
 人類學的方法に於ては、如何なる社會には如何なる事の有り得べきものか、
 何程の開化の度に在つては何程の變化が有り得べきものかとの事を探ねます
 から、我を以て他を推す憂もなく、又各の變化の道筋を調べますから無味に
 事實を排列する傾向を避ける事を得ます。
 事物變遷の研究に對しては、歴史的方法は推理的方法に優り、人類學的方法
 は更に歴史的方法に優つて居ります。材料缺乏なれば據無し、然も無くば人
 類學的方法に由つて事物變遷の理を考ふべきものであります。歴史的材料は

主として過去に屬す、是非の判斷極めて困難、人類學的材料は主として現在に屬す、當否見別け易し。去れば根據正確の點に於ても人類學的方法是歴史的方法に優つて居るのであります。

全世界の人民は決して同一様の開化の度に達して居るものではありません。諸人種悉く一定の狀況に存在して居るではありません。全世界諸人種を通覽すれば、様々の階級を知る事が出来ます。恰も一人民が數千年間若くは數萬年間に經過したものと同じ様な諸種の階級を一時に知る事が出来ます。甲の人民が最下級の位置に居り、乙の人民が其上に居り、丙の人民が其上に居るとすれば、是等人民に就いての或る事物の比較研究は、丁度一人民が甲の状態より乙の状態に移り、夫より丙の状態に移るに連れて、現はれる所の或る事物の變遷を調査するのと同様であります。故に人類學的方法是歴史の經過を一時代に引き寄せて示すものと申しても宜しい。

人類學的方法とても、其中に歴史的分子、推理的分子が皆無で有ると云ふ譯では無い、解釋を容易にする便宜が有る場合には更に之を加へるのが當然であります。人類學的方法是事物變遷研究の最良法、是が實行を試みんとする人々は常に諸人種間に行はるゝ事物は如何との點に注意して居るのが肝要であります。

玉を好む風

玉は金石學的に論ずる事も得ませう、美術的に評する事も得ませう。併し私この此所に述べやうとするのは人類學上からの所見であります。

根掛けの玉、簪の玉、煙草入れの緒締め玉、先づ是等が今日日本内地人の間に行はれる飾り玉の主なる物ですが八丈島では婦人が飾り褌に玉を繫ぎます。南京玉は子供の持て遊びとして用ゐられ又諸種の裝飾に使はれて居ます。

數珠も玉の集まりから出來て居ます。以上金石、珊瑚、貝殻、木材、煉り物、焼き物、硝子等で故らに作つた玉の類ですが、子供の玩具として用ゐる物には植物の實に孔を穿つたのが有ります。東京では見當りませんが他の諸地方ではズッゴダマと云ふ草の實を絲に貫いて子供が頸や手に掛けて居るのを屢々見掛けます。

太古の日本種族は更に多くの玉を用ゐました。此事は古傳に由つても窺ひ知るを得ますが、古墳を調査すると慥な證據が續々と現れ來ます。先づ外部から出る物では埴輪土偶と云つて彼の殉死代りの土人形ですが、之を見ると頸の周圍に玉を連ねて作つた輪を纏つて居る形に出來て居る。其玉の形には單に球形を仕て居るのと、コンマ形を仕て居るのとが有ります。夫れから内部發見物には次に掲げる様な色々の玉が有ります。

(一) コンマ形の玉。原料は瑪瑙、玉造石、青瑯玕、其他種々の石、稀に硝子。

長さは通常一寸内外。……………これは曲玉

(二) 筆の軸を切つた様な玉。原料は殆ど皆玉造石、長短、細大、一定しては居ませんが先づ通例長さ一寸位。……………これは管玉

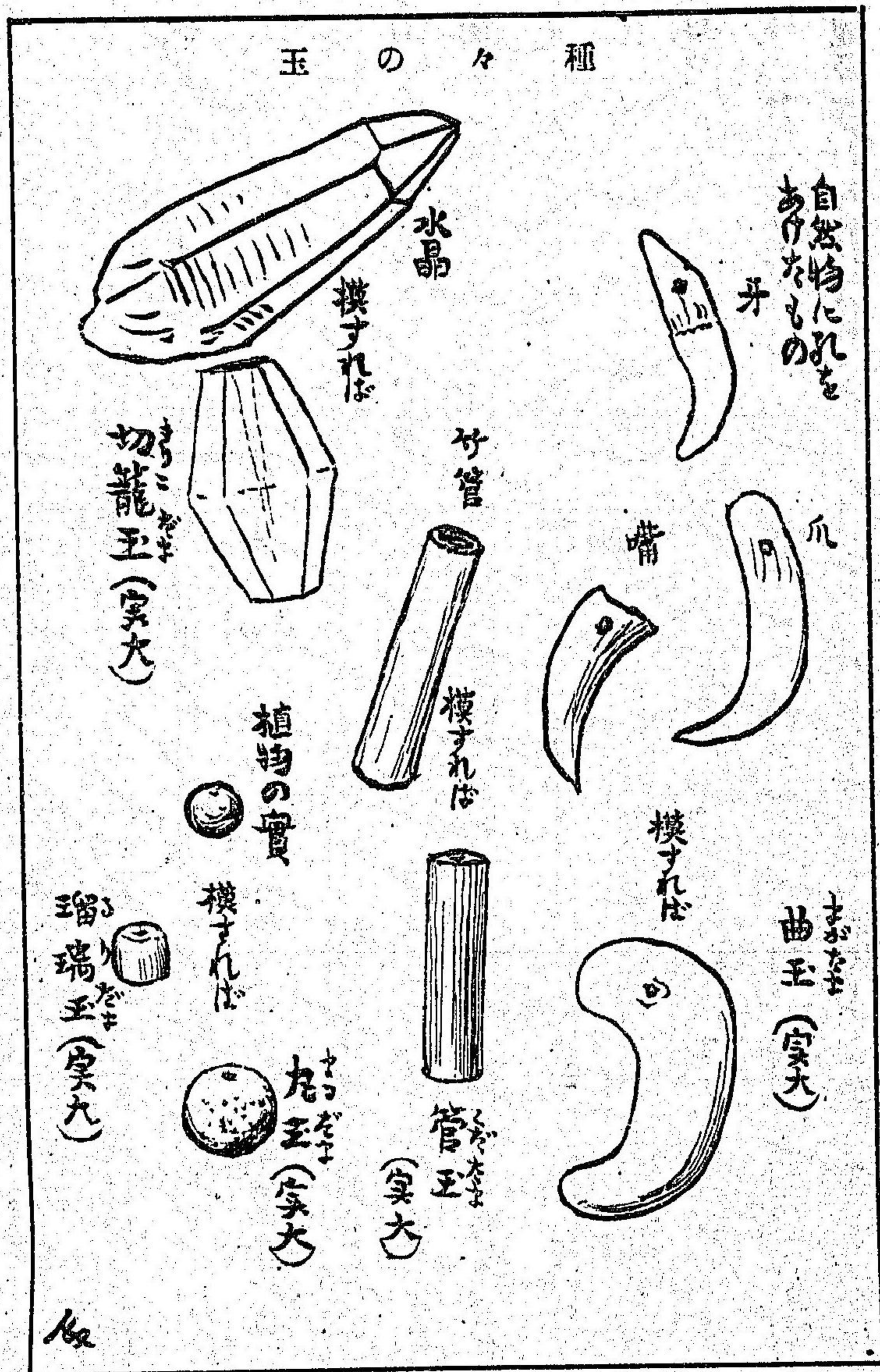
(三) 眞桑瓜の皮を剥いた様な形の玉。やかましく云へば二個の六角稜錐を基部で繼ぎ合はせ、其兩尖端を、繼ぎ合はせた面に並行した面で切つた形の玉。原料は水晶長さは矢張り一寸位。……………これは切籠玉

(四) さつと棗の實の様な形を仕た玉。原料は石も有り、琥珀も有り、埋れ木の様なものも有る。大きさは眞の棗の實よりは小さい。……………これは棗玉

(五) 直径二分位な丸い玉。原料は硝子或は煉り物。……………これは丸玉

(六) 直径二分位な瑠璃色の硝子玉。……………これは瑠璃玉

(七) 南京玉位或は稍大きな硝子玉。色は瑠璃が常で、時としては綠其他の色
の事も有る。……………これは小玉



(八) 滑石の薄板を切り抜いて拵へた小さい玉。……これは白玉。此他に山の字の様な形を仕た三輪玉と云ふ物が有りますが、孔の明いて居る物で有りませんから姑く省いて置きます。

以上の様々の玉は皆我々の祖先が裝飾として身に佩びたもので、其着け方は前に述べた土偶に由つても知る事が出来ます。又埋葬して有る屍體との位置の關係に由つても知る事が出来ます。兩方の事實を總括して考へて見るのに細かい玉は數多く繋ぎ合はせて頭髮の飾りとし、大きい玉は一種類或は彼れ此れ取り交ぜ主に頸飾りとしたものと思はれます。

日本種族に於ては今よりも昔の方が多く玉類を用ゐたので有りますが、北海道のアイヌや臺灣の生蕃は現に盛んに玉を用ゐて居ます。アイヌ女子の頸に懸けて胸の邊に垂れるシトキと云ふ飾りは多數の玉の連續で出来て居ますが其原料は何れも硝子で、固よりアイヌの手細工で拵へられる物では有りませ

ん。製造地は何所で有るか此所に詳に云ふを得ませんが。貿易品として大陸の方から傳へたと云ふ事は明かです。日本内地人は再びアイヌの手を経て是等の玉の中の或る物を得、之をカラフト玉と稱して珍重して居ります。内地人さへも珍重する程の物ですから、アイヌ女子は尙更の事誠に貴い寶物として大切に扱つて居ります。アイヌ男子中には自分の斃した熊の牙や爪を取つて是に孔を穿ち糸に貫いて頭飾りに仕た者が有つたさうで有ります。又植物の莖を短く切つて其心に孔を穿ち、丁度シトキの様に繋ぎ合はせて、飾りとお守りとを兼ねさせた物も有ります。アイヌの間にも内地と同様、人工品の玉も有れば自然物を其儘に用ゐた玉もあるもので有ります。臺灣生蕃の用ゐる玉にも木の實や獸の牙の様な自然物其儘のもの有り、瑪瑙細工の管玉も有る。此管玉はアイヌの硝子玉と好一對で矢張り開化の度の高い他種族から貿易品として得るので有ります。瑪瑙管玉の製造者は支那種族の

者。造る者は用ゐず、用ゐる者は造らず、貿易業者は得易い物を探つて、他の好みに投じて居るので有ります。琉球にも兩様の玉が有ります。一は自然物其儘の物、一は人爲を以て形を作つた物、甲の例としては植物の實も有るし、細竹の管も有る。乙の例としては石製及び硝子製の曲玉が有る。但し曲玉は由來が不明、現今の琉球人は之を作りもせず又作つたと云ふ傳へも有して居ません。自然物其儘の玉は平常の身體裝飾として用ゐられ、曲玉はノロクモイと云ふ女の神官が祭典の時に身に佩びる。日本版圖を去つて遠く諸國諸種族の事を調べて見ますに。開明と野蠻とを問はず、又現今と古代とを論ぜず玉を用ゐる例は實に澤山有りますが、之を總括し之を大別すると、自然物其儘の玉、人爲を以て形作つた玉の二部類と成ります。此二部類の玉は別々に興つたものでは有りますまい、同じ様に用ゐられる物で有つて見れば同時に始まつたか然らざれば一方の代りとして他方

が生じたので有りませう。開明人の玉飾りは昔からの仕来りで有りますし、野蠻人の玉飾りは開明人に接しない時分から有る。して見れば得易い物作り易い物の方が得難い物、作り難い物の方よりも前に有つたと云はなければ成りませぬ。自然物其儘の玉が、人為で形作つた玉に先だつ可きは疑ひの無い事で有ります。云ひ換へて見れば自然物其儘の玉が、人工品の玉を導いたので有ります。

曲玉は獸の牙や、爪や、角や、鳥の嘴や、爪の模造として作り出されたので有りませう。管玉は細竹の管の模造として、作り出されたので有りませう。切籠玉は水晶の六角形の結晶を模して作り出されたので有りませう。

棗玉は植物の實を模して作り出されたので有りませう。丸玉の原も植物の實で有りませう。

其他の様々な玉類も皆植物の實の模造から起つたと考へられます。

他種族の玉に付いても同様の事が云はれます。玉は元來自然物を其儘糸に貫いたのが起りで、人智が進み、望みも増し、技術も發達するに連れて種々の美しい物質を撰んで在來の品の模造をする事が始まり、段々模造と云ふ方の考へが薄らいで専ら形の好い物が作られると云ふ様に轉じて來た物と思はれるので有ります。

玉飾りの起原

曲玉の原は獸の牙や、爪や、角や、鳥の嘴や、爪で有らう、管玉の原は細竹の管で有らう、切籠玉の原は水晶の結晶體で有らう、棗玉丸玉の原は何れも植物の實で有らう、とは既に申しましたが、これは、曲玉、管玉、切籠玉、棗玉、丸玉等の起原で、全體を通じた玉其物の起原では有りませぬ。私は一歩進んで玉其物の起原に就いて説を試みやうと思ふので有ります。

凡そ或る風習の存するには二つの原因が有ります。既に風習と成つて行はれて居る事柄は殆んど生れ付きに具はつて居るが如くで有つて、偶ま之を去ると極めて物足らぬ心地がするのみならず、場合によると其缺乏が不快の感を惹き起こす。斯かる物足らぬ心地或は不快の感と云ふ者を避け、多数の爲す所に従ふと云ふのが原因の一つで有ります。も一つの原因は實際の用に在るのです。他事は姑く措き身體裝飾に付いて申しませうに、婦人の簪でも男子の襟紐でも單に習慣に従ふと云ふ計りで行はれて居るのも無く、又單に裝飾用の爲に行はれて居るのも無く、習慣にも従ひ裝飾の用をも辨ずると云ふ相方の働きの爲に行はれて居るので有ります。如何に仕來りて有つても當時の社會に不適當のものなら遣りませんし、如何に美しいものでも習慣から飛び離れた裝飾は行はれません。

玉を身に佩びると言ふ事も二つの點から考へる必要が有ります。美しい爲に

裝飾とすると云ふ方に付いては多言を要しませんが、彼様な物を繫くと云ふ風はどうして起こつたか、これは考へ物です。玉を多く付け様とするので自然紐の様な形と成るのか、紐を美しく仕様とするので玉を貫くのか、言ひ換へれば玉の爲の紐か、紐の爲の玉かと云ふのが問題で有ります。玉類特に自然物の玉(植物の實とか貝殻とか)は多く繫いで益々美しく成るので、一つ二つでは人の目を惹く程では無い。既に紐の飾りと云ふものが行はれて居れば、是等の玉を糸に貫いたら嘸美しからうとの念が生じませうが、單に是等を見ただで繫いで見やうとの考へが起こり、繫いだ上で身に佩びやうとの考へが起こらうとは想像し難い事でありませう。紐飾りが有ればこそ其紐を一層美しく仕様との希望が生ずるので、彼様な事の先立つ事無しに突然玉を繫いで身を飾らうと云ふ希望は生じさうに思はれないのであります。玉飾りは諸種族に通じて行はれて居る。決して或る限られた地方のみに存するのでは無い。

して見ると此所でも彼所でも突然の思ひ付きが起こつたと考へるよりは、何所にも通じて有つた事が原に成つて此風が生じたと考へる方が眞に近いで有りませう。

玉飾りの原と成るべき事で何所にも有つたらうと思はれるのは紐飾りであります。紐を以て髪かみの飾りとし、紐を以て鉢巻はちまきとし、紐を頸飾くびかざりとし、指輪ゆびわとし、腕輪うでわとし、足輪あしわとし、或は胸部きょうぶを飾り、或は腰邊こしへんを飾ると云ふ事は諸方に行はれて居る事で、斯かる部分ぶぶんに紐を纏まとふと云ふのは全く身體しんたいの形かたちに基いて起こつた事と考へられます。

裝飾品かうじくひんを身に付けるには三つの方法がある。第一は髪かみに挿さみ又は髪かみに括くわり付けるのであるし、第二は耳朶みみたね、鼻翼びな或は唇くちびるに孔あなを開けて此所に挾はさむのであるし、第三には容易たやすく落ちない部分ぶぶんに纏まとひ付けるのであります。第一第二の事は今用いまもちが無いから省はきますが、第三に付いて考へて見ると頭の鉢はち、頸くび、肩かた

腕、手首、指、腰、膝の邊、足首等が物を纏ふに適した部分で、此所にしなやかな物即ち紐の類を纏ふと云ふ事は何所の種族でも思ひ付きさうな事でありませぬ。紐を以て身を飾ると云ふ事が諸方で一樣に思ひ付かれたとすれば、玉飾りは僅かに一步の進みであります。植物の莖の美しいのを見ても其儘ではしなやかでないから身體の部分に纏ひ付ける事は出来ない。併し之を短く折つて其心に糸を通せば美しさは本の儘で有つて全體がしなやかに成り、曲げる事も結ぶ事も自由に出来る。一旦此事が明かに成れば、紐を美しくする爲には必らずしも植物の莖の如き長い物を撰ぶには及ばないと云ふ事も分かり、随つて様々の植物の實だの貝殻だの其他の細かい美しい粒の揃つた物へ故らに孔を開けて糸で繋ぐと云ふ風が起こつて來る譯であります。

夫れ故に私は玉飾りは玉を身に佩びると云が主で始まつたのでは無く、紐飾を一層美しく仕様と云ふ考へからして生じたので有らうと思ふので有ります。

玉即ち粒の揃つた孔の開いた物を、裝飾に用ゐると云ふ事の根元は、之を糸に繋いだ時にしなやかな糸の性質を失はないと云ふ所に在ると私は信ずるの
 有ります。

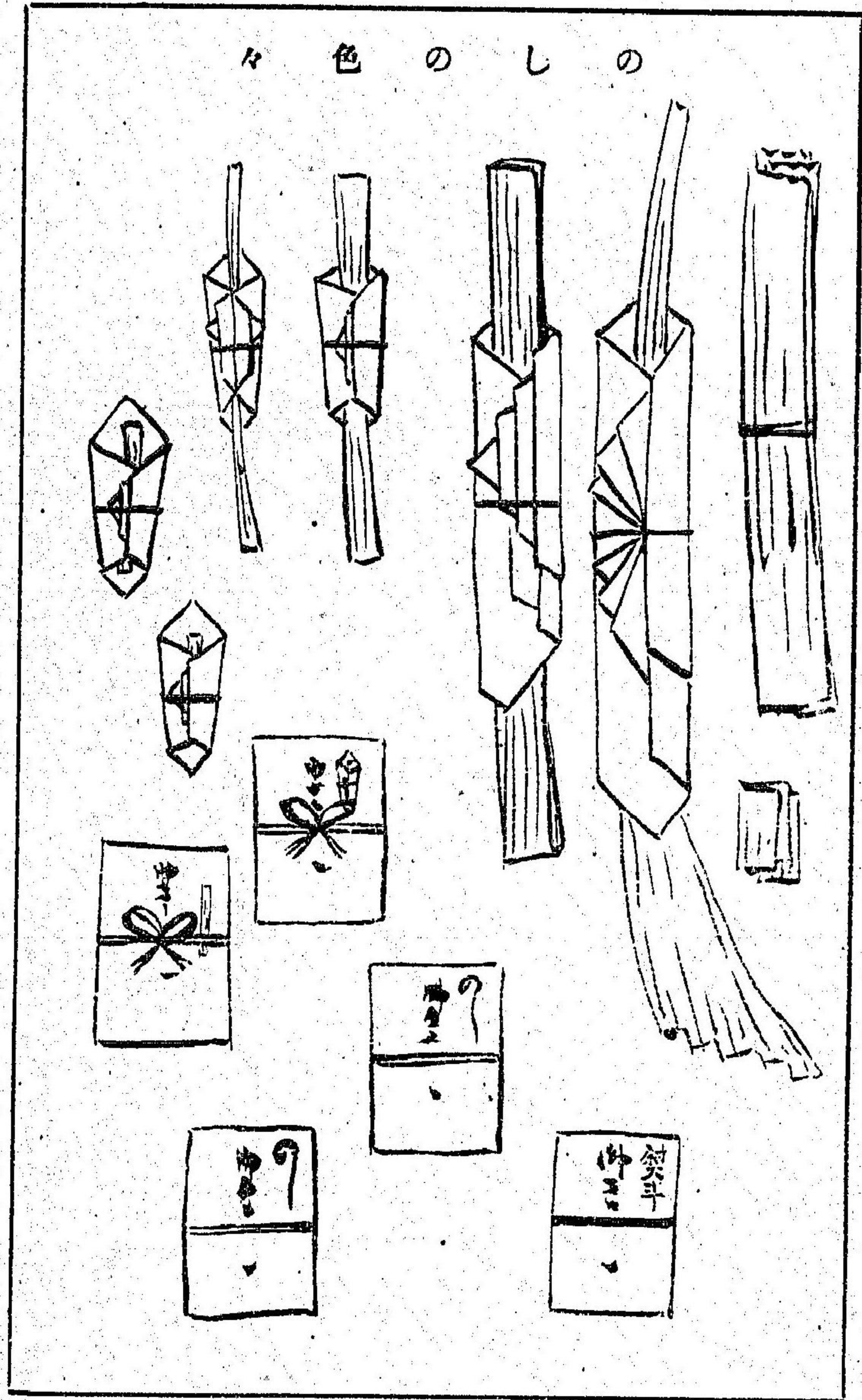
進物に添へる「のし」の變遷

進物の包み紙に「のし」と云ふ物を付け或は「のし」と云ふ字を書く「のし」と書くのは無論「のし」を添へる畧式とは誰も知つて居ませうが、扱「のし」と云ふ物は全體何であるか、夫れを進物に添へるはどう云ふ譯かと糺して見ると一寸答へが六かしく成ます。併し六かしい丈に面白味も有る。先づ「のし」の構造を御覽なさい。最も目立つ部分は上を廣く下を狭く左右から折り込んだ包み紙で、通例二枚から成り立つて居る。譬へて見れば二枚重ねの着物の様な物で、下着は白とか紅とか何か無地で有るが、上着は無地か模様物で有りま

す、下前は一寸折り返して有る丈。上前は二三段襷が付けて有る。又上前下前と重ねずに左右から折つて左右へ折り返したのも有る。帯は金紙を常としますが、正しく巻き付けて有る事も有るし、又兩端を僅かに後へ廻して糊で貼り着けて有る事も有る。斯く迄に意を籠めて包み込んで有る所の中身はどんな物で有りませうか。中身の長いのは上下に延び出て居り、中位のは上方丈に延び出て居り、短いのは主な部分を包の中に隠して上の端を襟とも云可き所から少し露して居り、極々短いのは襟の合はせ目の境の所丈にチヨイと着いて居る。其物質は蛇の肉を薄くそいで平らに引き延ばした物か、夫れに擬ふ様な黄色で薄く突つ張つた物で、時とするると單に黄色の紙切れが使つて有る事も有る。小さな紙切れを、大事さうに包んで置くとはどうも不釣り合ひな話し、是は勿論中身丈畧式に成つて居るので有らうとは誰も悟る所の有りませうが、長くて其質の正しく蛇で有る分も何故こんな風に仕て置くの

分かり悪い事では有りませんか。「のし」と云ふのは蛇の肉を延ばす事から
 出た名で、此黄色のベタぐした物が即ち「のし」の實躰で有ります。のし蛇
 が實躰で有るとして見れば、中身の短くて包み紙の太い「のし」は丁度赤兒に
 大振り袖を着せた様なもの、彼の黄色の紙切れを美しい紙に包み込んだのに
 至つては價值も無い土人形に立派な着物を着せたのと同様で有ります。中身
 が上下に延び出て居て其質が正しく蛇で有つても、どうも包み紙の方が勝つ
 て居る様に見える。通常の贈り物には前に述べた様な「のし」を付けるか、畧
 して「のし」と書くかする丈ですが、祝ひ事の折、又は量の大きい進物をする
 と云ふ様な場合には長「のし」と云ふ物を用ゐます。これは「のし」の實躰が長く
 幅廣く、包紙は比較的小さくて、しかも何の色取りも無い。普通の「のし」包み
 を見ると奇麗な紙包みの中に「のし」が這入つて居るとしか思はれませんが、
 長「のし」を見ると如何にも「のし」蛇を紙で包んだと云ふ感じが起こります。

のしの色々



著 者 畫

普通の「のし」包みよりは長「のし」の方が肝要な部分を好く示して居ますが、これよりも更に好く肝要な部分を示して居るものが有ります。色々な観覽場の幕や幟には「のし」と云ふ字が染出して有つたり、普通の「のし」包みの形が染め出して有つたりする。是等の中には又のし匏數枚を一束ねとした形を染め出したのも有ります。祝儀或は心付けとして金銭を人に贈る時に用ゐる紙袋にも「のし」の字を示したり、普通の「のし」包みの形を示したり、又は「のし」匏數枚を束ねた形を示したりしたのが有ります。進物の手拭、風呂敷、はがき杯の上包みとして用ゐる有る紙にも右と同様三種の印しのどれかが印刷して有ります。是等の中でのし匏を一束ねに仕たのが餘程面白いのですが、これは書に仕たの計りで實物は見た事が有りません。書に仕て有る位ですから、何れ實際にも斯う云ふ物の行はれた事が有るのでせう。のし匏を進物の印しにするには必しも紙に包む事を要しないと云ふ事は、是で推知されます。

が、此所で益のし匏の意義が明かに仕度く成る。「のし」匏は何故進物の印しとして用ゐられるので有りませうか、進物と「のし」とは抑々離る可からざる關係を有つて居るので有るかと云ひますに、決して左様では無く、玉子、鯉節、魚の様な動物質の物、所謂生臭物には「のし」を添へる事は有りません。凶事關係の遣ひ物、寺への遣ひ物、寺からの遣ひ物にも「のし」を添へる事は有りません。併し法事の配り物に昆布を中身に仕た「のし」包みの様な物を見た事が有りますし、又寺からの贈り物に「こぶ」と書いたのを見た事が有ります。「のし」は生臭物にも添へず、生臭物を忌む場合にも用ゐず、而して生臭物を忌む場合には昆布を其代用とする事が有る。是に由つて觀れば「のし」は進物の印しと云ふよりは寧ろ生臭物の代はりとして云ふべき物で有ります。北陸地方では鳥の羽根を進物に添へ總房地方では魚の鰭を進物に添へる事が有る。鳥の羽根や魚の鰭が「のし」と同じ場合に用ゐられると云ふ所を見ても「のし」の

生臭物の代はりであるとの事は明かである。羽根は鳥の器、鱗は魚の器、共に動物質食料品を表したものと見て「のし」も食料品たる事疑ひ有りますまい。神前の供物の中には「のし」を短冊形に切つて数枚揃へたものが有ります。この「のし」は稍「するめ」に似たもので昔は常に食べたのでせうが、今とても或は何所かの地方で食品中に加へて有るかも知れません。「のし」の變遷を引きくるめて云つて見れば次の通りで有ります。

第一、「のし」を食品として人に贈る。

第二、生臭物で無い進物は淋し氣な感じがするので是れは生臭物の一種たる「のし」を添へて贈る。

第三、「のし」を食べる風は衰へても生臭物で無い進物には相變らず之を添へる。

第四、既に形式と成つた上は「のし」の量は必しも多きを要さない。

第五、「のし」を包んだと云ふ意が現はされさへすれば包み紙の方が目立つても差支へ無い。

第六、生臭物で無い進物に添へた紙包みが「のし」包みらしく見へさへすれば、中身は必しも「のし」で無くとも宜しい。

第七、生臭物で無い進物に「のし」又は「のし」包みが添ふと云ふ事が常に成ると、此添へ物の無い物は進物らしく見えない、是が付いて居ると進物らしい、従つて是が進物の印しと見做される。

第八、「のし」包みが進物の印しと成れば、是等の繪でも又は「のし」の二字でも其意を示す事が出来る。

「のし」が進物の印しと見做されるに至つた順序は斯う云ふ風で有ります。何でも無い様な一寸した事も夫れから夫れと推し究めて見ると中々面白いもので有ります。

土俗品と古器物

諸地方住民が現に行はれて居る風俗習慣に従つて使用する所の物品をば、私は土俗品と呼びます。鍋、釜、箸、茶碗、羽織、袴、傘、下駄、蒲團、枕、筆、硯等は、即ち日本の土俗品で有ります。土俗とは土地の風俗の意、土俗品とは土地の風俗を示す物品の意と見て宜しい。古器物と云ふ語は解釋を下さなくとも、其意味が明かです。土俗品も時が経てば古器物と成るし、古器物も其使用當時に在つては土俗品で有つたのです。土俗品も、古器物も、人類の使用品たるに於ては同様で有りますが、一は現に用ゐられて居るものであるし、一は曾て用ゐられたもので有るのです。多くの場合に於ては、土俗品は今の物、古器物は昔の物と申しても差支有りませんが、何時からが今で、何時までが昔か、今と昔との界は何時で有るか云ふ問ひが起る

と、明瞭に答へる事が出来ませんから、今の物、昔の物と云ふのは、誠に漠とした區別と云はなければ成りません。現用品か現用品でないかと云ふ事なら直ちに別る。或る物品が或る地方に於て、現に用ゐられて居るかどうかと云ふ事は、自ら見ても、人に尋ねても、知る事は六かしく無い。今日實際に行はれて居る物品が土俗品、行はれて居らぬ物品が古器物と區別を立て、見ると、其物品を製造した時の事は又別問題と成る。假令或る物品が近頃の製作でなく、或は何十年前、或は何百年前に出来たとしても、現に用ゐられて居さへすれば、之を土俗品中に算入し、又或る物品が近年作られたにしても、用が失せて仕舞つて居れば、之を古器物と見做すので有ります。彼様な區別の立て方は人々の隨意で、固より左様仕なければ成らぬと云ふ理窟は有りませんが、私は先づ此考へに據て思ふ所を述べる積りで有ります。土俗品を見て知る事の出来るのは、第一に何所の住民は何事に際して如何な

る物を用ゐるか云ふ點であります。これはホンの表面上の話で、よく考へればまだく色々な事が別つて來ます。漬け物の重し石の如きは、自然の物を其儘で使ふので有るし、燧石の如きは自然の物を打破つた計りで用ゐるので有りますが多數の土俗品は種々の人工を経て居ります。此所に一つの箱が有ると致しませうに。其製作を注意して見れば、何枚かの板が或る大きに切り、或る厚さに削つて有る。又釘が打つて有るとか、膠が着けて有るとか云ふ事が有る。即ち切り、削り、打ち、着けると云ふ技術の有つたことが知れるのみならず、釘や膠の存在も別かるし、間接には枝を切る鋸の如き道具板を削る鉋の如き道具、釘を打つ槌の如き道具、膠を着ける籠の如き道具の有つた事も推知されるし、尙溯れば是等の道具の作られた事も推察される。器物の形狀や裝飾を見れば、製造者の意匠好尙も推し測られ、形狀裝飾の由つて來る所を考へれば、是等の起原變遷も知れる。長さ、幅、高さを測つて

彼れ此れ比較して見れば、一定の尺度の用ゐられたか否かも別り、場合に由つては使用された尺度が、凡そ如何なる目盛りになつて居るか云ふ事も知れる、形狀裝飾に圓い所があれば、其規則正しいか否かに由つて、轆轤とか文廻しとかの用ゐられたか否か、知れる。裝飾が畫れたものならば、其繪の具の種類も別るし、間接には此爲に用ゐられた筆とか刷毛とかの種類も別る。更に溯れば繪の具の製法、筆や刷毛の製法も推測される。若し又裝飾が刻まれたものならば、彫刻の技術、彫刻の道具も考へられる。土俗品の原料は單一なことも有りますが、又寄せ集めのこともあり。何れにしても其調査は、原料と製作所との關係を示すもので中々面白い。或る品物は手近に在る物質を以て作つて有り、或る品物は遠方に存する原料を撰んで拵へてある。原料の何たるか知れた上で、一層深入して考へれば、其取り出し方、其運搬方も想像される。土俗品を調べて知る事の出来るのは、決して其用計りでは

有りません。以上述べた通り様々の事が知れるので有ります。唯一つの品物からでも其品物の行はれて居る社會の狀態が、多少推し測られるので有ります。品物を數多く寄せれば、夫れ丈に精しく種々の事が知れて來る。假令或る品物を獲て、其用の何たるか詳で無いとしても、他の諸點に關して幾分なりとも智識を得る事が出來れば、調査の甲斐は有ると申して宜しい。或る品物を見て其用が知れないと、用が知れないから詰らない杯と云ふ人が往々有りますが、用と云ふものは土俗品調査の價値が著しく減ると云ふ譯のものでは有りません。土俗品調査練習の爲には、自分のよく知つて居る品物に付いて、種々の方面に考へを馳せて見るが宜しい。座敷の床の間に下がつて居る懸け物を見て、其主要部たる書畫の事はかりで無く、之に用ゐてある紙なり絹なりの質、或は繪の具、或は墨、或は用筆の事、表裝法から其原料に至る迄、種々の事をば直接間接に推し究め、又臺所の流しに置いて有る手桶を見

て、木の削り方、組み合はせ方、繩の作り方、嵌め方等を察知すると云ふ様にする時は、初めて見た他の品物に付いても同様に様々の事柄を容易に探り明らめる事を得るに至りませう。斯様に考へて見れば、土俗品の調査と云ふものは、中々趣味の有るもので有ります。オーストラリヤの土俗品を調査すれば、オーストラリヤ土人に關する種々の事が別かりジャヴァアの土俗品を調査すれば、ジャヴァア土人に關する種々の事が別かる。土俗品は或社會の產物で、従つて其社會の面影を示すもので有ります。古器物は過去の時代に於ける土俗品で有りますから、其調査は過去の時代に於ける器物の用、器物の製法、其製作に當つて使用された道具の種類、當時の人の意匠好尚、形狀裝飾の變遷、尺度や文廻しの有無、總べて前に述べた様な事柄を明かに致します。古器物には用の知れない物が幾らも有りますが、既に申しました通り、用は調査事項中の唯一のものたるに過ぎませんから、

用が知れずとも、古器物は古代の社會状態を推察するに於て、極めて有益なものであります。否夫れ所では有りませんが、古代の有様を明かに知らうと云ふには、必ず古器物調査の力を藉りなければ成らないのであります。私は土俗品調査に就いて、長く記しましたから、古器物調査と云ふ事に付いて、似寄りの事を縷述する事は止めます。唯古器物調査の古代事物を明らかにする事、猶ほ土俗品調査の諸地方住民の状態を示すが如しとの事丈は申して置きませう。私は多くの人の土俗品や古器物に對する考へ方が足りないと思ふ事を感じて居ります。私は本篇を通讀された諸氏は、自ら調査に従事して見よとの念を起こされぬにしても、調査の益有る事丈は、認められたで有らうかと思ふのであります。

古墳調査は如何なる點に於て人類學を益するか

四國九州本土の諸地方には何時築いたとも分からない塚が澤山有りますが、其形には饅頭の様なものもあり、瓢の様なものも有つて、小さいのは直徑數間、大きいのは直徑數十間、時としては其周圍に溝を廻らして有る事も有る。道路や耕地に接した所に在るものは往々削り減らされたり、斷ち割られたりするので、其内外から種々の物が露出する事が有りますが、最も目立つのは石で組み上げた部屋や、石で造つた櫃で有ります。石の櫃の中には人骨、裝飾品、武器等が有り、石の部屋の中には是等の他に灰白色の土器の有る事が有る、塚の周圍からは間々赤褐色の土製の圓筒や人形の缺けが出ます。裝飾品は主として曲玉、管玉。武器は主として直刀。人骨と共に是等の入つて居る石櫃は即ち石棺、石の部屋は即ち石槨で有ります。灰白色の土器はいはひべ赤褐色の土器は埴輪立て物。此の如き構造を有し、此の如き遺物を含む塚を指して吾々は特に之を古墳と申します。古墳と云ふ語は廣く古代の墳墓を意

味する事も有りますが、本篇に於ては今申した様なものに限るものとして用ゐます。

彼様な塚の行はれ始めたのは何時であるか、行はれなくなつたのは何時であるか、年数を掲げて確かに云ふのは固より困難では有りますが、今を距る二千年前後或る連続した時期の間、斯かる塚を築く事が行はれたと云ふ事は明かです。

通常の場合に於て墳墓を調べると云ふのは何の爲めかと云へば

(一) 或る格段な人の埋葬された場所を知る爲か
然らざれば

(二) 或る格段な墓の如何なる人の埋葬所で有るかを知る爲

で有ります。墓地へ行つて石碑の文字を讀めば探ねる所の墓を見出す事も有り、又夫れと違つて居るにしても其墓は誰の墓で有るとの事が知れる。文字

が磨滅して居るとか、石碑が破損して居るとか云ふ時には間々様々の考證、種々の議論の出る事が有りますが、目指す處は大概皆誰の葬所を探るとか、墳墓の誰のものたるを明かにすると云ふに在るので有ります。

古墳調査も矢張り同様に考へられて居るので、某所で古墳が発見されたとか崩壊されたとか聞くと直ちに夫は誰某の塚で有らうと云ふ様な説が出る、又古墳其ものに付いて實地の調査を仕て居ると其所に葬れた人の誰であるかを穿鑿するので有らうと速断される。古墳調査は固より斯かる目的を以て行はれる事もありますが、斯かる目的の他には古墳調査の用が無いと云ふものでは有りません。歴史の側から云へば無論歴史上知られて居る人物或は歴史上知られて居る事件と關係を有するので無ければ古墳調査の價值が少いで有りませうが、他の方面から見れば又他の點に於て益する處があります、私は是れ迄も時々古墳調査に従事致しましたし、今後も従事する折が有らうと思ひま

落の事さへも幾分か窺ひ知るを得ます。埴輪立て物の調べは當時の服装器具等の如何を明かにし、且つ土製品を焼く技術の様子をも告げます。いはひべの調べも亦其用法と其製法とを示し、之れが形状模様に由つて我々は古人の好尚をも推察するを得ます。石槨の築き方を見れば築造者の勞力知識共に思ひ遣られ、石材の質を明かにして其自然の産地を探ぬれば運搬に關する諸事も分かつて来る、石棺に付いても是れと同様の事が云へ、尙ほ石を截り石を彫り石を磨く術をも推して考へられる。埋藏物の最も肝要なのは人骨で有るが、其調査結果は左の諸事を明かにする。

- (一) 一つの塚に葬られたる屍體の數
- (二) 葬られたる者の男女
- (三) 葬られたる者の老若
- (四) 葬られたる者の骨學的諸性質

すが、私の目指す所は主として人類學上の益を得ようと云ふに在るのであります。塚と人物との關係が知れ、ば夫れに越した事は有りませんが、知らないからとて著しく直打の下がると云ふ譯も有りません。同じく古墳調査であるのに史學的だの人類學的だのと云ふ違ひがどうして存するのか、夫れを疑ふ人が随分有る様で有りますから、私は古墳調査が如何に人類學的研究に益を與へるかと思ひますから全く省きます。史學の側の事は此處に云ふ必要はないと思ひますから全く省きます。

饅頭形や瓢形の盛り土の或るものを見て我々は多分古墳であらうとの事は申しますが、愈と云ふ事は何か證據と成る遺物が發見されない中は申されません。埴輪立て物の破片かいはひべの破片か、石槨又は石棺の部分でも見付ければ、其塚は古墳と鑑定されますが、此場合に於ては塚の大小で築造の勞力が推測され、従つて使役された人夫の多寡や、夫れ等の住居した都會或は村

- (五) 骨或は齒の上に現れた人為變化
- (六) 骨或は齒の上に現れた疾病又は負傷の徵候
- (七) 塚の内に於ける屍體の置き場所
- (八) 塚の内に於ける屍體の置き方

是等に關する實見上の智識は葬られた者の人種的所屬、古今人類の骨學的異同、古代人類を冒した病氣の種類、古代人類の身體裝飾に關する風習、古代人類の埋葬に關する風習等を知るに於て有益で有ります。

石槨或は石棺の中には朱又は他の赤い色料の存して居る事が有る。これは所謂朱詰の形跡でありませう。人骨は時とすると直接に石を以て覆はれて居る事がある。木棺の有無、身に纏つた物の如何、共に實地調査に由つて幾分か知る事の望みがある。之に屍體の置き場所、屍體の置き方に關する事實を添へて考へれば埋葬風習の要點は一層明瞭に成るで有りませう。

裝飾品の身體諸部分に對する位置も好く注意して見れば生時に在て如何なる物を如何なる部分に着けたかとの事を知る據と成ります。

尙ほ精細に仕やうと思へば云ふべき事は幾らもありますが、凡その事は以上述べた所で分かつたらうと考へますから、此上の深入りは致しません。

古墳調査には種々の利益が伴ひますが、葬られた物の種族、人類、男女、老若等を明かにし、骨學上古今の異同を詳にし、當時の風習に關する智識を正確にするが如きは人類學研究者の深く希望する所で有つて、之より生ずる結果の學術的價値は極めて大なるものであります。

古墳に對する人類學的觀察が如何に史學的觀察と異なるかはこれで分りましたらう。葬られた人の誰たるを探るのを以て古墳調査唯一の目的と考へるのは甚しい誤りと云はなければなりません。何卒古墳の眞價が廣く世に認められて誰の塚とも考定され難い古墳に關する事實も輕々しく見過ごされぬ様に

致したいものと思ひます。

石器時代遺跡の實査は人類學上如何なる利益有りや

我が日本の地には、全體に石器時代の遺跡が澤山ありますが、殊に武藏下總常陸等の諸地方に於ては、著明なる貝塚、著明なる遺物包含地が多く有るので、隨分實査に出掛ける人々があります、是等の人々の中には遠足旁々慰みを主として行くも有り、何か玩弄物と成る物を獲ようと云ふ好事に促されて行くも有り、單に所藏標品の數を増さうと云ふ丈の望みを以て行くも有り、學問上の利益の爲に遺物をも採集し、遺跡をも實見しやうと云ふ念に動かさず、斯様に種々異つた目的で出掛けるのではあります、學問に縁の遠い人や、我が知れる學藝のみを有益のものと考へて居る人の中には、往々彼此を混同して、石器時代遺跡の實査は總て物好きな遊

び、或は無益な骨折りと思つて居る人も有る様子であります。又少年の人々傍ら仕事に手を出す人々の中には、先進者、學者が爲る事で有るから何ぞ役に立つので有らうとて、或は自ら其行ひを學び、或は他の手傳ひを仕ながら、實際如何なる利益が有るか熟知して居らぬ向きも無ではありません。其で一部分の人からは、知れ切つた事、との謗りを受るとも、成る可く言ひ漏らしの無い様に仕度いと申すのが私の考へであります。若し是に由つて、従前は學問上の考へ無しに遺跡の實踐を仕て居た人々の中に、其意向を變へて、直接なりとも、間接なりとも、人類學の爲に働く人が、一人にても出来る様な事が有るか、又は従前は全く遺跡實査の念の無かつた人々の中に、自ら研究を爲るとも、他人の研究を補助するともして、人類學の進歩を謀る人が、一人にても増す様な事が有れば、實に幸福であります。本編は遺跡實査の主意を誤解して居る人と、十分に解して居らぬ人との問ひに對する答とも云ふべ

きものでありますが、未だ解せざる人の爲にも手引きの用を爲せかしと、望んで居るので有ります。

古來最も多くの人が實査した石器時代の遺跡は奥羽地方に在ると思ひますが、現今此事の最も盛んに行はれて居る地方は、前に記しました通り、武藏下總常陸等でありませう。併し石器時代の遺跡にして今日迄に知れたるものは、南の方臺灣より北の方千島樺太に迄至つて居りますから、多少の差、大小の別こそ有れ、日本國中何れの地方に於ても、次第々々に種々の發見が有つて實査者の數も益々殖えて來る事と信じます。然れば未だ一の遺跡も發見されざる地の人も、此所に記す所を通讀して置かるゝならば、後日幾分か思ひ當たらるゝ事も有らうかと考へます。

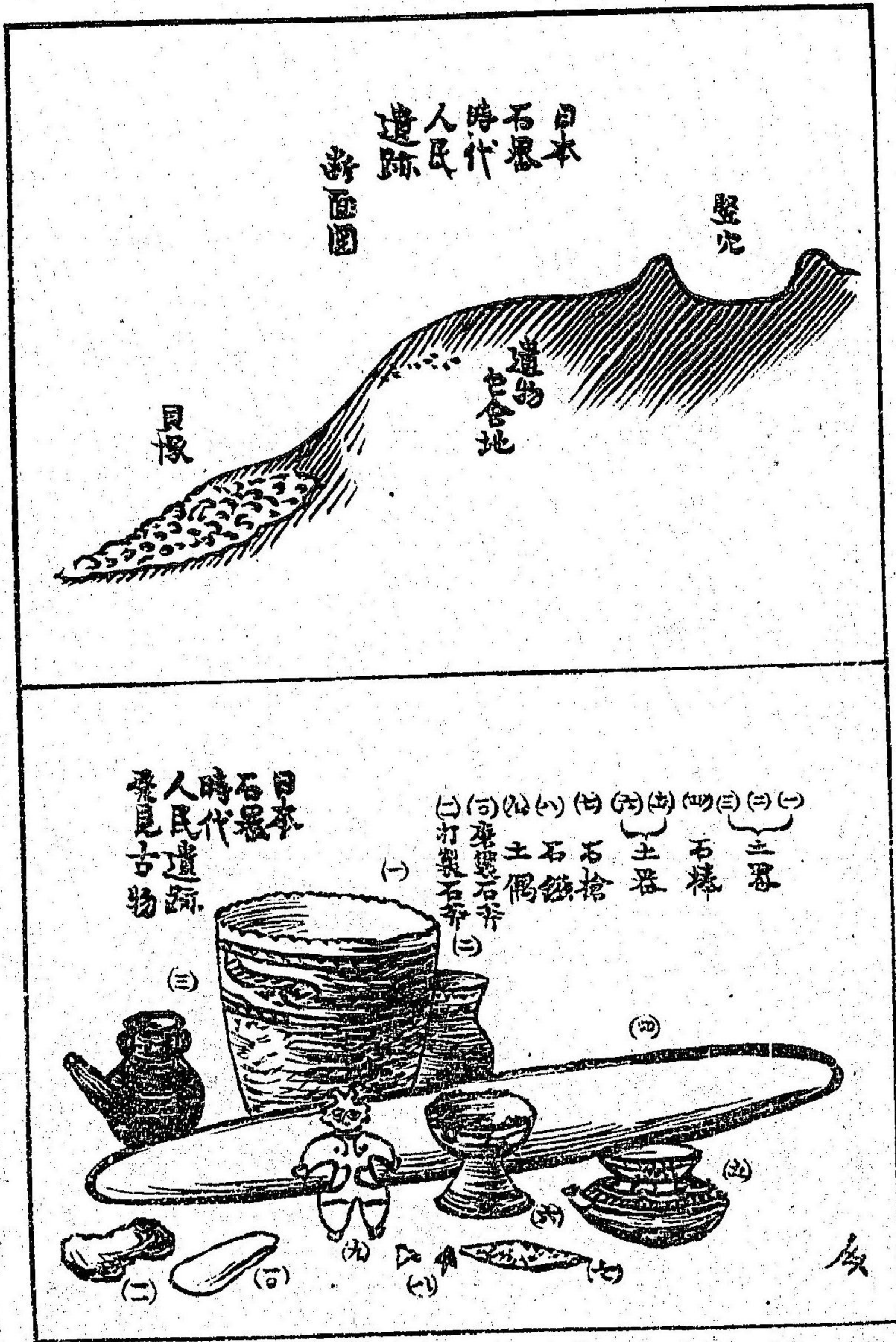
先づ石器時代の遺跡とは如何なるものかと云へば、石を打ち缺き或は研ぎ磨いて刃物として居た人民の棲息した證據の有る場所で、日本に於ては主なもの

のが三通りあります。其第一は貝殻の堆積して居る中に石器其他同時代の遺物の挾まつて居る所、即ち我々が貝塚と呼ぶもの、其第二は土中に右同様の遺物の挾まつて居る所、即ち我々が遺物包含地と呼ぶもの、其第三は摺り鉢形の大穴で底に右同様の遺物の埋まつて居るもの、我々は之を堅穴と呼んで居ります。

是等の遺跡を實査して得る所の智識は、遺跡其者に關する事と、此所にて發見する遺物に關する事との二つに區別して説くのが便宜であります。

遺跡の方から述べ始めませう。貝塚は貝殻の堆積して居る場所であるが夫は如何にして出來たものか、との事は、貝殻及び他の混入物の種類と是等存在の状態とに由つて推知する事が出來ます。二枚貝の多くは離れ離れに成つて居ますし、巻き貝の或るものは一部分に打ち缺き孔が明いて居る。貝殻中に混じて居る魚鳥の骨は散り散りであるし、獸類の骨は或は折り、或は傷けし

て有る。貝殻や骨の中には焼け燻つたものも有り、別に焼け木の小片や灰の塊りも有る。尙ほ他の混り物を算へ舉げれば、石器の破片、土器の破片等でありませんが、右に申しました事の全體を據として考へて見れば、貝塚なるものは食用に供した鳥獸魚介の堅い部分や、火食の遺り物たる焼け木及び灰、其他石器土器等の壞れた物を捨てた所、即ち石器時代の掃き溜めで有るとの事が解かります。稀れには貝殻層中完全な土器を故らに埋めた様に見える所もありませんが、何の故に彼様な事を仕たものか未だ詳でありません。貝塚は元來何で有るかと云ふ事、又其場所は如何なる事に用ゐられたかと云ふ事は實查の後で無ければ決して十分に考定する事は出来ません。貝塚の廣さ、厚さ、所在の地勢杯も實踐して始めて精細を知るべきものであります。之を知らば或る貝塚を遺した所の人民の多寡、其人民の住居して居た年月の長短、棲息の場所として選ばれた地の有様等を知る事が出来ます。



著者畫

同一時に或る限られた地に住んで居た人民の数が多ければ、此人民の物捨て場は人数の少い地の掃き溜めよりは面積が廣い譯でありますし、同一の地に人が長く住んで居たとすれば、此人の遺した不用物の厚さは、一寸居ても無く他所へ移り去つた人のものよりは厚い筈であります。此故に私は貝塚の廣い狭いは住民の多寡を示し、厚い薄いは居住年月の長短を告げるで有らうと考へて居りますが、是等も多くの實地探究を経なければ當否を明言する事は出来ません。從來の經驗に由れば、鹹水貝塚存在の位置は大概一様で、東京で申せば上野公園とか本郷湯島とか云ふ様な高臺の地で殊に東から南に掛けての崖に接近した所に多くの遺跡が在るのであります。是等の高臺は古への海岸、崖下の低地は其の頃の海底、東から南に掛けての崖は恐らく日當りの好い爲に住居地に選ばれたので有らうと考へられます。低い地と雖も貝塚が全く無いではありませんし、高臺の貝塚の中にも西方や北方を向いたもの

が無いにも限りません。然れば貝塚の實地調査は石器時代人民が如何なる地を以て住居に適した場所と見做したかと云ふ事を知るにも必用なると、又場合に依ては一つの遺跡と他の遺跡との年代の新古を知るにも必用であります。鹹水貝塚は元來海濱に在るべき者で有るのに、或は現今の海岸から數十丁又は數里を距る所の丘の麓に在つたり、或は是等の丘の上に在つたりすると云ふのは、土地の隆起の爲に生じた結果で有つて、各の遺跡の海からの距離は其年代を考へるに付いて大なる據と成る事でありませぬ。貝塚の上部は通例露出して居るものでありますが、時としては幾らかの黒土を以て覆はれて居る。此事も亦年代考の好材料であります。貝塚の作られた當時は無論其表面が外部から見えて居たに違ひありませんが、貝塚を遺した人民が其場を退いてから以後は、時が経つに従つて或は風の爲に吹き寄せられた土砂塵埃を以て上部を覆はれ、或は此所に生じた草木の腐敗の爲に覆ひ物を増されて、恰も敷

き物の上に又敷き物を置き、其上に又敷き物を展べた様に段々と厚く遺跡が埋もれたてでありませう。貝塚は元來多少の高まりを成して居るもの故、其上を覆ふ黒土は風雨の作用で再び他に散亂され、或は耕作建築道路開通等の爲に人爲を以て運び去られる事が屢有るものであります。此の如き譯故何れの貝塚に就いても一樣に望まれるものでありませんが、後人の手に觸れた事の無い様な場所又は少かるべき場所に於ては覆ふ所の黒土の厚さが大に年代考の材料と成るのであります。貝塚の上の黒土の有無、舊の儘なりや否やの判断、後人の手に觸れざる黒土の有る場合には其厚さ如何等の事は遺跡を實査するに非ざれば到底確知するを得ません。

遺物包含地の實査も亦種々の利益を生じます。貝塚の在る所と同様な地形の場所、又は海遠き地方の丘の上杯を歩くと、折り折り石器土器の破片の散布して居る所に行き當りますが、斯かる場所は眞の石器時代の遺跡では無く、

遺跡の掻き亂された跡、即ち遺跡の遺跡とも云ふ可きものであります。我々は以前彼様な地をば土器塚と呼んで居りましたが、是では土器が重なつて高い塚形でも成して居る様に聞えて甚だ誤り易い所から、近頃は遺物散列地又は遺物散布地と呼ぶ事と致して居ります。遺物包含地の眞の有様は地面を深く掘り下げた時か、新道を開鑿する爲に丘を切り壊した時に於て始めて知る事が出来るのであります。包含地は断面に成つて居る所を横から見るの故、水平面の廣がりは何程で有るか知る事は六かしい、先づは出來ないと申して宜しいのであります。其代り遺跡を覆ふ黒土の厚さは、貝塚に就いての調べよりは更に明かに知る事が出來ます。此土の厚さは年代考に大關係有る事既に申した通りでありますが、遺物存在部の土の厚さは何を示すものか未だ詳でありません。遺跡實査は覆土の厚さに由つて年代を考へる計りで無く、遺物存在部の土は如何にして出來たるものかとの事を熟考するならば、此點に

於ても新に有益なる知識を得る事が出来るに違ひありません。遺物包含地の中には貝殻を雜えない掃き溜めもありませう、住居跡もありませう、或は又土器石器の製造場もありませう。是等の事を知るには是非とも遺跡を實査しなければなりません。

堅穴は北海道諸地方に於ての他、未だ確なる發見がありませんが、アイヌ間に存する彼等以前の人種に關する口碑に徴して又現存諸人種の土俗を調べても其住居跡たるべきは察するを得ます。併し實地探究を経れば、發見物の種類や、其存在の有様、又は多數の堅穴が群を成して存する様子杯に由つて、十分に精細に堅穴の用を推知するを得ます。廣さや深さは人傳てに聞く事も出来ませうが、周圍の土手の切り目、即ち出入口は地形、風向き等と如何なる關係を有するか杯と云ふ事は實踐の上で無ければ容易に考へは付ません。以上は遺跡に付いての話してありますが、次に發見物に付いての事を申しま

せう。

遺跡に於ての發見物には、天然物と人造物との二類があります。天然物の主なるは貝殻と獸骨。種類名稱を明かにする事は採集して歸つてからの方が仕易くはありますが、遺物全體に對する多寡、各種相互の比較的分量等は遺跡に臨んだ時でなければ知り難いのであります。之を知れば石器時代人民の食物に關する嗜好の様子も知れ、現今近海に産する貝類や、程遠からぬ地に住む獸類の比較的多少が、古代のものとは一致するや否やも知れて參ります。諸動物盛衰に關する精細なる研究は、固より動物學者に委ねべき事でありませうが、貝塚の出來た當時と現今と動物種類の上に如何なる異同が有るか云ふ事は、貝塚の年代を考へるに付いて一つの據とも成る事でありませうから、遺跡實査者は此觀察からしても學術上の利益を得る事が出來ます。貝殻や獸骨の中には灰や焼け木に混じて居て當時の調理法を立派に示して居るものがある

るのでありますが、遺跡を調査せずに、灰は灰、骨は骨、と離れ離れに成つたのを見ては中々正しい考へは浮びません。魚の鱗の一ヶ所に捨て、有る事、其中に鱗搔きとして用ゐたと見ゆる貝殻の存する事杯を知るのも又調査の賜であります。貝塚からは人骨の出る事もあります。全體具備して居るか、諸骨散在して居るかとの事は、存在の理由を考へるに付いて極めて肝要な事柄であります。全體具備して居れば、故らに埋葬したものと考へられ、諸骨散在して居れば、或る原因の爲身體諸部分切り離されたものと考へられる。埋葬にもせよ放擲にもせよ、其場所は物捨て場故、人骨の存在は殊に注意して調査する事が必用であります。発見された所の人骨は實に貝塚の作られた當時のもので有るか、或は後世混入したもので有るか、骨は揃つて居たか、離れ離れに成つて居たか、等の問ひに對しては該遺跡調査者の他は何とも答へる事を得ますまい。

遺跡発見、人造物の主な物は石器土器であります。完全なものと破片との割り合は如何、何れも投げ捨てた様な位置に存在するか、或は幾らか埋め隠した様な形迹も有るか、破片は此所彼所に散亂して居るか、或は一個の物の破片は一ヶ所に寄つて居るか、土器は上向きに成つて居るか、或は下向きに成つて居るか、石器土器は遺跡中平等に分布して居るか、片寄つて存して居るか、凡そ是等の事は石器時代人民の所業を考へるに當つて最も有用の事柄であります。皆遺跡調査者のみの知る所であります。石器製造の順序、土器製造の順序の如きに至つては、原料、半成品、屑、造り損じ等迄も比較對照に缺く可からざるもので有つて、是等の有無及び其存在の態は實地に就いて調査しなければ分からう筈がありません。如何に完全なりとも、如何に美麗なりとも、出所不明なる石器土器は學問上の用少く、如何に粗末にして且つ破損し居るとも、儘に某遺跡中より出たりと云ふを得るものならば學問上の

用は甚大で有る。遺跡實査の價値は此事に就いても知る事が出来ませう。石器時代遺跡の實査は我々をして遺跡の性質を察知せしめ、遺跡の年代を考ふる根據を得せしめ、石器時代人民住居地選擇の事を知らしめ、住民の多寡及び棲息年月の長短を悟らしむ。

石器時代遺跡の實査は又我々をして石器時代人民食物の嗜好如何を知らしめ、食物調理法を推究するを得せしめ、人骨に關する疑問に答ふるを得せしめ、石器土器製造の順序を推知せしむ。之を要するに、石器時代遺跡の實査は我々をして石器時代人民の風俗習慣諸種の性質、此人民存在の古さ、同時に在つての人口、同所に於ての居住時間等を知らしむるもので有つて、是等諸事に關する知識は、日本に石器時代の跡を遺した人民は何者で有るか、彼等と我我日本人及びアイヌとの關係は如何で有るか、其人民は何所より來て何所へ往つたか、彼等は世界の人種中にて如何なる地位を占めて居たか、日本の石

器時代と他の石器時代との異同如何、日本石器時代人民に關する諸事實は一般人類發達の事を考へるに於て何程の力を有して居るか等の問題を攻究するに當つて極めて有用なもので有ります。

古代石器研究の興味

我々は今日常に鐵製の刃物のみを使つて居るのでありますからして、刃物と云へば一概に鐵製或は少くとも金屬製に限るかの如く考へる人が有るかも知れませんが、其實智識は低く技術は幼稚で未だ金屬器を作る事を知らない者が幾らも有る。就中北アメリカ北部の住民や太平洋諸島の住民杯の中には世界他地方の者が日々に進んで行くにも拘らず、依然として石器を製造使用して居る。斯の如き者を稱して石器時代の人民と云ふので有るが、今日の開明人も曾て石器時代人民で有つた事が有り、今日或る開明人の居る地にも、曾

て他の石器時代人民の居つた事も有るのです。現存石器時代人民の石器は、唯、諸種の器具の中の一種類として見るべきもので、特別に珍重すべき理由は有りませんが、古代の石器に至つては研究上の價値が中々大なるもので有ります。等しく石器で有るのに何故古代の物の方が現時の物よりも貴いかと云ひますに、現時の事は敢て石器を待つて始めて知るべきでは有りませんが、古代の事と成ると、腐るべき物質、崩るべき物質のものは其形を失ひ、唯、石器の如き物のみが遺るので、之を措いては他に探り知る手掛かりが誠に少い。總て古物の研究と云ふものは探偵掛りが或る事件に關して遺留品を調査する様に、意を傾けて仕なければ成らぬものですが、石器に付いても先づ此考へを持つて居るのが何より肝要で有ります。モツト解かる事が有りさうなものだ、モツト解かる事が有りさうなものだと、推し究めて行くと、思ひも寄らぬ事までが明かに成つて來るもので有ります、斯かる主意に基いた

研究法を心得て居れば、他人の蒐集したものを見ても、其價値を十分に認め、事が出来るし、自分が採集調査に従事する場合には面白味を感じる事が極めて深い。先づ第一に或る石ころを見て夫れが單に石ころたるに過ぎないが、石器の部類で有るかを見別ける事から記しませう。自然の形を存し、全體に丸みを帯び、表面が滑かで一見人工を加へた跡の無い様な物でも、手に採つて熟視すると、或は叩き疵が付いて居たり、或は糸でも括り付ける爲かと思はれる打ち欠き、若しくは切り目が付いて居たりする事が有る、疵だの欠け目だの切れ目だのは、石と石とが觸れ合つて偶然出來る事も有るには有りますが、疵が或る場所のみ限つて存するとか、欠け目、切り目が相對する部分にのみ有るとか云ふ時分には、これは人が故意に物を打つた爲に生じたので有らう、これは人が糸を括り付ける目的を以て故らに作つたので有らう、と云ふ様な事が察せられる。苟くも人が用ゐた形迹

が有つて、多少自然の儘の有様と異つた點が有らば、之を石器の部類として差支へ無い。扁平の石で一面は滑かな自然面を存し一面丈缺けた様に成つて居るものの中には、其缺け方が故らに刃の様な薄い部分を作り設ける爲に打ち缺かれて出来たと見える物が有りますが、疑ひも無い石器と比較して見て、其缺け方や缺け方の向きが相一致して居るならば、此石片も石器の一種と考へて宜しい、石片の全體或は大分部を打ち缺き、或は擦り磨いて特別の形に仕た物は正しく石器で有りますが自然に缺けたのか人為で缺いたのか、自然に擦れたのか人為で磨いたのか、綿密に注意して篤と判断する必要が有ります。

打ち缺いて作られた石器を打製石器と云ひ、擦り磨いて作られた石器を磨製石器と云ひ、或る部分のみを磨いたものを局部磨製の石器と云ふ。尚ほ刃物と刃物で無い物とを區別する爲には甲を石製利器、乙を石製器具と呼ぶのが

便利です、石を缺いて矢の根の形に仕たもの、類が打製の石製利器、石を磨いて斧の形に仕たもの、類が磨製の石製利器、石を粗缺きに缺いて、一部分を磨いて刃を付け一種の斧の形に仕たもの、類が局部磨製の石製利器、石を打ち缺いて錘りの様な形に仕たもの、類が打製の石製器具、石を磨いて棒の様な形に仕たもの、類が磨製の石製器具で有ります。

石器即ち多少人工を施した石と云ふものは、何れ何所かで何時の時代かに、何者か、どうかして拵へて、何かの爲に用ゐた譯の物で有りますから、調べ方に由つては是等の事が明かに成り、其明かに成つた事實からして又他の事實も探り出されるので有ります。

何所と云ふのは誠に容易な問ひの様ですが、其實中々左様で有りません。世間には随分人を欺くのを何とも思つて居らぬ者も有ります、(特に古器物を人に賣り付けやうとする者杯の中には) 又出所を明かにする事の價值を十分に

悟らぬ爲に好い加減の答へで間に合はせて置く人も有ります、又正しい事を云ふ積りでも、思ひ違ひをして不圖誤つた事を云ふが如き場合も有ります、箱とか包み紙とかに出所が書き付けて有つても、其中の物が慥かに入り違ひに成らずに居るかどうか請け合はれない場合も有ります。何所の物か確とは分らないと云ふ物と出所の明かな物とは、學問上の直打ちが甚しく違ふ遺留品は探偵の重んずる物では有るが、何所に在つたのか分らないと云ふ様な品では、一向役に立たない。古物の出所は遺留品の存在場所と同様で、之を明にする事が極めて肝要で有る。自分の発見したものは大丈夫。斯く考へて見れば自ら或る古器物を発見し、若しくは信用を置くべき発見地の報告に接する事が如何に大切で有るか、分かりませう。品物の事は扱置き、何所で発見したと云ふ其事が既に面白い事なので有ります。夫れは何かと云ふと発見地に付いては尙ほ一言しなければ成らぬ事が有る。

或る物の発見せられた地が、眞に其物の以前から有つた所かどうかと云ふ事で有ります。古代の遺物は、故らに埋めたのと、自然に土で覆はれたのとは、問はず、土中に隠れて居るのが常で有るべき筈で有りますから、地上で得た物は多少其位置が變つて居ると認めなければ成りません。耕作の折抔に偶然掘り出されたと云ふ様な物は、先づ其地の物として差支へ有りませんが、時とすると遠方から運んで來た土砂中に混じて居たと云ふ様な事も有りますから、存在の有様に好く注意しなければ、何所で得たと云ふのを以て直ちに何所に古くから有つたと云ふ事と同様に考へる譯には行きません。出所が正しく分かつた上は、其物の行はれた時代が知り度く成る。之を知らうと云ふには、其物は何と共に存在して居たかと云ふ事と、其物は何程の土で覆はれて居たかと云ふ事とを明かにするのが肝腎で有る。其場合場合で様故、何と共に出れば何時の物、何程深ければ何程前の物と、此所に明言す

る事は出来ないが、幸にして古器物を掘り出したならば、是等の點には必ず注意しなければ成らぬ。人の得た物に付いても是等の點は探れる丈探つて置くが宜しい。一つの事實では何とも判断の出来ぬ事も、幾つか集めて比較すれば、次第々々に分かつて来るもので有ります。

石器類の製造に付いては原料と製法と考ふべき事が二つ有る。此原料の調査は中々面白い。或る石器は其發見地に有る石材で作つて有るが、或る石器は其地に無い石で作つて有る、他地方の石で作つた石器は、其石の産地に於て或る形に作られた後持ち來されたか、然らざれば原料が其地から運ばれたか、更に他の場合を考へれば、甲の地の石を乙の地で石器に仕上げ、夫れを丙の地へ移したか、で無ければ成らぬ。何れに爲ても夫れ夫れの地の間に交通の開けて居た事が推察せられる。石器なり其原料なりが、一地方から他地方へ持ち行かれるには直接の事も有らう。中間の地を經、其地の住民の手を

經て間接の事も有らう。従つて其道筋が眞直な事も有り、彼方此方と曲りくねつて居る事も有る筈で有る。山を越えたか、川に沿ふたか、之を考へるのも中々面白い。海とか大きな河とかを隔てた地の間に交通が有つたとすれば、舟の類の存在した事も想像せられる。一地方の物が他地方に於て發見せられると云ふ事は、一地方の住民が他地方に移住した結果としても、一地方の住民が他地方と往來した結果としても、起り得べき事で有るが、其往來と云ふ中には、態々原料を探りに行くと云ふ場合も有らうし、自分の方の或る物品を他地方の者の有する或る物品と交換する爲に行くとか云ふ場合も有らう。第二の方は貿易の始まりで、此方面の事を考へるのも亦興味の深い事であり有ります。

製法に關しては先づ打製磨製の別を調べ、缺け方擦れ方を熟視して、製造に必要な器具及び其用の方を考へる時には當時の人間が眼前で働いて居る様な

心地が仕ます。種々の石器器具の中には、他の石器を製造する時の道具として用ゐられた物も有りませんが、石器の類は金属器が行はれる様な社會に於ても製造される事が無いでは有りませんが、夫れは寧ろ取り退けて、通例石器は石器の時代の物と見て差支へ有りません。刃物さへも石で拵へた頃の物ならば石器其物を作るに用ゐた道具が金属製の物で有つたとは思はれず、製法を考究するに當つては常に此事を意に留めて置かなければ成りません。次には用法の事で有りますが、矢の根形の石器が獸の骨に刺さつた儘で発見せられたり、斧形の石器が木の幹に打ち込まれた儘で泥炭の中から発見せられたりした例も有りまして、或る石器の用は明かに分つて居りますが、多数の場合に於ては形と質とに由つての推測、未開種屬現用の石器に比べての類推で判断するより他に用を考へる據は有りません。使用の當時には或る物には柄も付いて居たで有りませう、或る物には臺も付いて居たで有りませう。

斯かる付屬物が有つたとしても、長い年月の間には朽ち腐れて仕舞ふ譯で有りますから、石器の用は必しも石器丈の物として考へるには及ばず、何物かを副へた物として考へても宜いので有ります。愈々と云ふことが證明出來なるとも、凡その推測を以て各の石器に名稱を下して置くのも便利で有りますから、矢の根形のものには石鏃、鎗形のものには石鎗、錐形のものには石錐、斧形のものには石斧、杯と呼ぶ事に成つて居ります。是等は總て利器の類ですが、此他にも石器の種類は澤山有ります。一つの石器を採り其用に付いて種々想像を走せて見るのも誠に面白いもので有ります。以上の諸事に付いての考へが精密に成つて來れば、人種の事も追々と明かに成つて來る。心無き者の目には一片の石、一個の石ころで有るが、見やうに由つては學術上有益な結果が得られ、研究者自身に取つても興味津津たるものが有るので有ります。

日本最古住民に關する豫察と精査

凡そ古代の事は口碑記録、即ち言語或は文字の傳へに由つて知る事も出来るし、又當時の遺物に由つて知る事も出来る。記録は文字有つて以來のもの。人類は文字の定まる前に長い經歷を持つて居る。初期の記録は口碑を文字に寫したに過ぎない。即ち傳へとしては口碑が古いには違ひ無いが、口々相傳へたものには誤りが有り勝ちである。聞く人に強い感じを起させんが爲めに話しに光澤を添へる事も有らう、煩を避けて省く事も有らう、爲にする所が有つて枉げる事も有らう、記録の混亂も有らう、不注意の爲に事實の錯雜を生ずる事も有らう、想像や作り話しが實際の出來事と繋がり合つて仕舞ふ事も有らう、長い間には傳への絶えたる事も有り得べく、事柄に由つて本來何の傳へもない事が有る譯で有る。古物遺跡の調査は此誤りの有り勝ちな口碑

の正否を考へ、口碑の絶えた事や始からして口碑の存して居らない事を探るに於て極めて肝要で有ります。我が日本の地には記録以前の時代に屬する古物遺跡が澤山有つて我々は之に由り最古住民に關する知識を得る事が出来る。日本最古の住民は何者で有つたか、其生活状態は如何で有つたかと云ふ事を知るは、單に不明の事を明かにすると云ふ丈でも既に面白い事であるが、人智の發達住民の移動を考へる上には誠に好い據と成るし、特に我々日本人に取つては、此日本の地に於ける太古の事實を審にし、且つ我々日本人自身の成り立ちを調べるに當つても参考に資すべき譯で有るからして、専門的に偏した研究に従事する者に向つてのみならず、多數の人に對して興味ある問題であると信じます。扱日本最古の遺物とはどんな物かと云へば、石鏃、石斧等の種々の石器、夫れ等と伴つて發見される骨器、角器、土器等で有つて、最も著明で且つ種類

に富んで居るのは石器で有るし、外國に於ては斯かる遺物を石の時代の遺物と稱へ來つて居るので、我々は日本諸地方發見の石器及び相伴つて存在する種々の物を總稱して石器時代遺物と云つて居る。前述諸品の行はれたのはどれ程以前の事とも明言し難く、之を用ゐたのは何者であるとも斷定し兼ねるので、便宜上、時代を石器時代と云ひ、人民を石器時代人民と申して置くのであります。

そこで日本最古の住民が石器時代人民で有ると云ふのは宜しいが、日本の諸地方に於て發見された石器時代遺物を以て必ず同一種族の物で有るかの如く考へるには及ばない。石器時代人民と云ふものは決して類の少ないもので無く、ヨーロッパ諸地方にも居つたし、アメリカ諸地方にも居つたし、アフリカの諸地方にも居つた、否夫れのみでは無い、今尙ほ石器時代の境遇に在るものは南洋諸島にも居る、アメリカの兩端にも居る。古今遠近様々の石器時

代人民が有るとすれば石器時代人民と云ふ事の必しも同一種族と云ふ事で無いのは明かでありませう。今日の日本は北の方樺太千島から南の方臺灣に至る大小多數の島嶼の連なりから成り立つて居るので、全部を通じて石器時代人民は一つで有つたとは考へられない。現に北海道丈けでもアイヌも居れば内地人も臺灣丈けでも蕃人と土人と内地人とが居る類例を以て推して見ても北千島から臺灣に至る程の長さの地には幾種類かの種族が居たらうと思はれる。之を事實に徴するに、臺灣の蕃人は曾て石器を用ゐたとの事で有るし、北千島土人も今を距る甚だ遠からざる時に石器を用ゐて居たとの事であるから、日本の兩端には正しく種族を異にする石器時代人民の遺物が存在する譯であります。北千島發見の石器と臺灣發見の石器とは各々異つた特徴を具へて居て容易に識別が出来るし、且つ二者を連続させる中間物は存在しない。石器に混じて發見される土器に付いても同様の事が云へる。日本の兩端には

幸にして石器を用ゐたと云ふ種族が住んで居るので石器時代遺物は彼等の祖先の手に成つたので有らうとの判断を下す事が出来るが、兩地方の間のものに付ては其由來を探るが中々面倒である。此中央に位する大部分の地に石器時代の跡を遺した者は、其分布の廣さに於ても、本來の日本の地との關係に於ても日本石器時代人民中の主要な者に相違無いので私は屢ば特に之を主要なる石器時代人民と稱して居ります。臺灣は固よりの事、琉球も、千島も昔からの日本では無い。樺太所屬の確定も近頃の事。是等を引き去つて考へて見れば、此所に云ふ主要なる石器時代人民が取りも直さず日本最古の住民に當たるので有ります。

日本最古の住民即ち日本の主要なる石器時代人民は抑も何者で有るか、人に由つて答へ方が區々で有ります。

一説に彼等は我々日本種族の祖先であると云ふ。(一)

一説に彼等はアイヌ祖先で有ると云ふ。(二)

一説に彼等の中、南方の者はアイヌの祖先、北方の者はアイヌとも日本種族とも異なつた別種族で有ると云ふ。(三)

一説に彼等の中、北方の者はアイヌの祖先、南方の者はアイヌとも日本種族とも異つた別種族で有ると云ふ。(四)

一説に彼等は總てアイヌとも日本種族とも異つた別種族で有ると云ふ。(五)

第一説の據は日本種族とても開けない時分には石器を用ゐたもので有らう、古史に云ふ「いしつ、い」「くぶつ、い」の「いしつ、い」は石の槌の事で、石器が我々日本種族の祖先の手に成つた證とするに足ると云ふ位な事で、誠に薄弱なもので有ります。我々の祖先が石器を用ゐたとした所で、現に諸地方で發見されるものが夫れに當るかどうか證明を要する事で有るし、彼の「いしつ、い」の「いし」が果して眞の石を指したるものであるか或は形容の詞たるに

過ぎないか、これも考へものでもあります。石器時代土器は土質に於ても形状に於ても裝飾の意匠に於ても日本種族のものとは全く縁が離れて居ますし、石器時代遺跡発見の人骨は日本種族の人骨と其特徴を異にして居ます。第一説は迎も成り立ちません。

第二説の主張者は石器時代遺物は日本種族のものとは認められないが、日本の地に居つた日本種族以外の者と云へばアイヌで有らう現にアイヌと同種族たるべき北千島土人は慥かに石器土器を用ゐた證據を有して居るから、日本諸地方の石器時代遺物もアイヌのものとするのが正當で有る、と云ふので有ります。同一地方に於ても、(特に時代を異にすれば尙更)二種族以上の者が住めないと云ふ理由は有りません。又アイヌの祖先が石器土器を使つたとした所で諸地方発見のものが夫れに相當するかどうか其研究が肝腎で有りますが、今日の所では兩者一致の證明が缺けて居ます。

第三説に於ては北海道本島アイヌの間に彼の地の石器土器は先住者の遺物であるとの口碑が存するから、是等はアイヌ以外の者の手に成つたので有らうが、アイヌとても今こそ石器土器を作らないが、以前は作つたで有らうし、丁度以前廣がつて居た筈の日本本州諸地方に石器土器の存在するのは彼等の祖先の遺したものの様に思はれると説くので有ります。此説は北海道本州の遺物とは別種族の製作に成つた物と見た上で立てたので無ければ成りませんが、兩地發見遺物の間には夫れ程の相異は認められません。

第四説は北千島土人は曾て石器時代の境遇に在つた者で有るが其住居たる堅穴と同様の堅穴が北海道本島にも存在するから、是等の穴と伴ふ石器時代遺物は北千島土人と同様な者の手に成つたと思はれる、然るに此千島土人と云ふ者は詰まりアイヌと同種族で有るから北海道の石器時代遺物はアイヌの物と見て宜からう、青森附近の堅穴が慥かに石器時代のものならば此邊の遺物も

矢張同種族のものと云ふ事が出来るので有らうが此不明の例の他、本州から九州に至るまでの諸地方には堅穴が存在しない所から見ると是等の地の石器時代遺物はアイヌならざるものが遺したので有ると考へられると云ふので有ります。北千島土人が堅穴を作つたのも事實、北海道に堅穴の存在するのも事實で有りますが、堅穴を作ると云ふ事は北方の土俗として珍しい事では有りませんから、これのみに重きを置いて種族の異同を論ずる事は出来ません、遺物の比較も第四説の據として有るに違ひ有りませんが、北千島の石器土器と北海道本島の石器土器とが同種族の物で有るとは未だ劇に認める事を得ません。北海道本島に北千島土器に類する土器の存すると云ふ事は有りませう。併し之を以て直ちに兩所遺物の一致を説くのは穩當と云ひ兼ねます。一方に於ては此比較が十分で無い上に他方に於ては北海道本島の石器時代遺物と内地の石器時代遺物とが別種族の作つたものと見なければならぬ程に異つて

居ると云ふ證明が缺けて居ます。内地に堅穴の存在しないのは元來無かつたのか、土地が開けるに従つて埋められて無くなつたのか、此事も明かでは有りません。第四説は前の三説よりも優つては居りますが最も誠らしい説とは考へられません。

私の兼ね兼ね申して居る所で今も尙ほ事實に近からうと信じて居るのは第五説であります。主要なる石器時代人民の日本種族で無い事は此所に論ずる要は有りませぬ。之をアイヌに比較するに

(一) 骨格に相違がある。(二) 土偶に由つて考へると男子は殆皆ひげ無しでアイヌとは大に異つて居る。(三) 身體裝飾が全然異つて居る。(四) 服裝が全然異つて居る。(五) 布の織り方が全然異つて居る。(六) 敷物の編み方が全然異つて居る。(七) 器物裝飾模様の意匠が一様で無い。

此他不一致の點は幾らもありますが、一致の點は一向見付かりません。私は